『つややかに焦げてゆく』

作　吉田康一

【登場人物】

ともえ　――二十六
ユリ　――二十九
一郎　――四十二
みふゆ　――二十九
斎藤俊平　――四〇
キリコ　――三十七
みわ　――三十二
キリコの同級生・鳥子　――（声のみ・みわ役が兼ねる）

【舞台】

全体的色調は黒。
本舞台は正方形。その正面奥に壁。
本舞台の正方形の外周は、道として使用。
また、本舞台に伸びている道が一本。
舞台上にはなにも置かれていない。
（イメージは能舞台に近しいカタチである。一本の道は橋掛りをイメージしている）

シーン０　前説

客入れ中。ともえ役の俳優が、舞台にいて、適宜に何度かアナウンスする。

女　本日はご来場くださりまことにありがとうございます。上演時間は、一四〇分を予定しております。途中、休憩はございません。いまのうちにトイレなど気になりましたらお済ませください。すぐソコのあそこにふたつございます。通路をこーんな感じ歩いて行って、どうか程よく使ってください。あたしはしばらく、適当にしゃべったり「紙飛行機」なんかをつくったりして、場をつなぎたいと思います。えー、ありふれたアナウンスで申し訳ありませんが、携帯電話、時計など音の出る電子機器の電源は、あらかじめお切りいただきますようご協力お願いいたします。上演中に携帯電話のディスプレイをご覧になるような行為は、本公演の鑑賞としては(お客様に)望んではおりませんので、この点もご理解いただきますようお願い申し上げます。なお、劇の本編中に、公共の場ではすっかり疎外されてきております、アノ煙、に似たような、その他の煙、を使用いたします。一応、公式サイトで調べてみたところでは、火を使わずに煙も匂いも灰も出ないとうたっておりました。副なんとかケムリも出ないそうです。が、ニオイ、ある気がします。もうお察しくださったかと思いますが、タバコが苦手はお客様がいらっしゃいましたら、恐れ入りますが、少しでも離れたお席を見つけて選んでいただけたらば、お互いに、害がございませんね、キット。

折り紙して、紙飛行機を作って、飛ばしたり拾ったりして過ごす。

開演のタイミングで、次に進む。

えーっと、非常口の確認ですが、あちらの階段となっております。もしなにか地震、襲ってきましたら、スタッフが誘導いたしますので、その場で落ち着いてお待ちください。避難所は新宿御苑のようです。震度３を上演休止、震度４を上演中止の目安とさせていただきます。…地震。起きないこと願いましょう。

あ、上演中の録音、写真撮影、飲食はバッテンさせていただきます、ですが、飲食のほうは飴やペットボトルなど、その程度でしたらけっこうです。ただその際は周りにご配慮くださりますようお願い申し上げます。…ただですね、あんまりまわりに気をつかうとですね、かえって「劇場あるある」パターンに陥ってしまいます。たとえば飴。開けるとき、ゆっくりやると、隣周辺はとにかくチリチリが気になります。あと、ペットボトルですね。しずかーに鞄から取り出して、しずかーに蓋をあけて、ゆっくり、クチにふくむ。上品でステキなんです、が、すると、なぜかむせる。ひたすらむせる。ゴホンゴホンとまらなくてお芝居どころじゃなくなります。ですので、飲食の際は、多少の気遣いを込めて、はい、なるべくサラッと、いつもどおりにサラッとやっていただければと思います。ふだんあまり意識しない行為を、意識しながらやってしまうとですね、人間はみょうなことになるみたいです。

紙飛行機をマイク代わりに、女はともえになってうたいはじめる。

シーン1　ともえの部屋・内・夕〜夜

ともえ、紙飛行機をマイクにして、明るくうたう。
中島みゆき「蕎麦屋」。

ともえ　♩

ともえは電話を待っているのだ。
サビまで歌うが、ダイヤルもない。なにも起こらない。

ともえ　♩

沈黙。
ダイヤルもない。だれもこない。なにも起こらない。

ともえ　……。（クチで着信音をいう）ブルブル、ぷるぷるぷるぷるぷる。（紙飛行機をまるでスマホのように耳にあてて）はい、もしもし？　――え？　え？　……え？　え？　え？　（間）……え、……、え……、ええ……　（スマホを耳から離す）

ともえ、思いのなかで――
紙飛行機をぐにゃりと握りつぶす――

ともえ　（その思いのなかでまた「蕎麦屋」うたう）♩

胸にこみ上げるものがあって、ぐにゃり潰した紙飛行機を、床に投げる。

ともえ　……♩（くやしい涙があふれそうになりながら、まだうたい、間奏をくちずさむ）トゥ〜、トゥトゥ〜ルゥ〜ルゥルゥ〜…ふーふふ〜

ともえ、寝転がる。
照明変化――

ここは、ともえのひとり暮らしの部屋。夜――
仰向けになっているともえ、聞こえにくい声でか細く、

ともえ　（自嘲する）……もう（電話なんか）…一生、二度と一生、かかってくることない……。……（未練あるが、でも強がっていう）あたしだって、もう、もう二度と会う気ないし、一緒に歩かないし。

引き裂かれるような、絞られるような、胸の苦しさがある――

ともえ　――

やがてスマホを取り出す。画面をなんとはなしに眺めはじめる――
電話帳をスクロール。スクロール。スクロール。
ひとりの名前で、指がとまる。

ともえ　――

舞台の一角に、一郎、登場。
音（雨の日の、駅前の喧騒を想起させる音）――

ともえ　――

ともえ、天井を眺めて。目を閉じる。
やがてスマホを胸にあてて、虚空にいう。

一郎　（スマホに耳をあてていて）――
ともえ　もしもし
一郎　――
ともえ　もしもし
一郎　（わかっているというような、うなずきがあり）もしもし。

間。

ともえ　お元気ですか。
一郎　（ややあっていう）うん。
ともえ　なんだかずいぶんひさしぶりな気がします。
一郎　ずいぶんひさしぶりなんだと思う。実際。
ともえ　――
一郎　――
ともえ　お元気でしたか。
一郎　（やや間あって）うん。キミは？
ともえ　（間あって）はい。ついさっきまでは。
一郎　つい？　そう……
ともえ　きょう、誕生日だったんですよ（あたし）。
一郎　え。
ともえ　――
一郎　いくつ、になったの。
ともえ　――ウソです。
一郎　……。　（一郎は、なんでウソついたの、とは聞かない）

沈黙。

ともえ　あの。
一郎　――
ともえ　……。雨…ですね。
一郎　あ、ああ。うん。聞こえる？
ともえ　（間あって）聞こえます。
一郎　（そう）

沈黙。

ともえ　あの。
一郎　うん？
ともえ　あたしと寝たい、と思ったことありますか？
一郎　……
ともえ　――
一郎　……
ともえ　――
一郎　……
ともえ　ありますか？

長い沈黙。
一郎、スマホを耳にしたまま動かない。

ふたり　――

照明変化。
転換。

シーン2　渋谷駅前周辺・夜

雨の夜――

傘をさしたひとびとが交差、交錯している。

ユリ、キャリーバッグ（仕事道具が入ってる）を引いて、その一角に。

ユリ　スクランブル交差点の隅に立っている――――。

アタシは今夜はネカフェに泊まる積もりだ。親に内緒で仕事を辞めてきてしまった。なので、適当な、新しい仕事先が決まるまでは泊まり続けるって決めていて、この三連休中に不眠不休の覚悟でエントリーを満喫する。アタシ的にはよく続いたほうの二年間という時間のなかで、シッカリ会社に発育されてアタシは、他人（ヒト）の顔色ばかりみて生きて、スッカリ胃袋が弱くなってしまった。トイレと書いて避難所と読む。いっそのことピアスとタトゥーを身体の目立つところの至るところに散りばめまくって、二度と堅気には生きてゆきませんゼ宣言、できちゃう覚悟なんか持てたら持ってみたい。だけど母の顔が浮かんでくるので、まあそういうことはできない。そんなわけでネカフェを探すべく、駅の周りを一周していた、ら、雨がゆるゆる降ってきて、少しずつ強くなってきて、ん、しばらくしたらそれも弱くなってきて、いまは惰性でなんとなく降り続けてますっていう感じで、覇気がないというか、気合いがないっていうか気の抜けたというか、申しわけないけど雲のジョーロの水が無くなるまで降らさせてもらいますよっていう感じで、この空は、この暗い空は、雨粒をこぼし続けている。

ひと通りを見て――

天気予報では「曇り」といっていたのに、こう、すれ違うヒトの多くがこうして傘をさしていて、なにごとでもないように雨のなかを歩いてゆくのだから、まさかとは思うけれど、もしかするとアタシだけが天気予報を聞き違えたのかもしれない。もしかしたら、今日は、もともと雨の降る日だったのかもしれない。すれ違いざまにカチリと目があった女性が「こんなにはっきりしない天気ばかり続いているのに傘も持ち歩かないなんて」、そう無言でいってくるのが聞こえてきたような気がする。

その背中を見送って――

気のせいだな。渋谷の駅前はいつものように、そこそこのヒトの数で溢れかえっている。もう、夏のいちばん暑いところがすっかり過ぎて、九月ももうシルバーウィークを越えようとしている。アタシはこの途切れそうにない雨と、途切れないヒト波をなんとはなしに眺めて、ずいぶんと無為な時間を送っている気がする。

シーン3　同（渋谷駅前周辺）・夜

渋谷駅前のひとびとのひとり・キリコ、別の一角からいう。
（キリコはワンプッシュ式の折りたたみ傘をさしている）

キリコ　おびただしいほどのニンゲンたちが、駅の改札から吐き出されるように押し出されては傘をひろげて雨のなかをどこかへと向かってゆく。そのひとりひとりがだれかと会うためにここを通り過ぎているんじゃないかとわたしには思えた。みまわすと、いろんなヒトがいろんなヒトを探している。人待ち顔で、だれかを待っていたり、だれかに待ってもらっていたり。もし、ここのその、ひとりひとりが、これから会うそのヒト、に出会うために生まれていたとしたら。そんな、人生のいちばんのキセキを感じながらそのヒトと会っていて、「本当の愛」、をみんなが知っていて、そんなヒトたちで溢れかえっていたら、この駅前全体が。（間）冬の日曜日の日中の、もうなにも話すことがなくて駅まで歩いて改札で見送った、うしろ姿のあのヒトの背中を見送った、あの日をわたしはいまも覚えている――。あの日以来「はぐれてしまった愛」に、どうしていまさら執着してしまうのだろうかしかし。ままならないこころのままわたしは、溺れさせてよいのだろうかわたしを。　ポツポツと降っている暗い夜空を見上げながら、わたしは、わたしから遠ざかって行ったあのヒトの、いつかの最後の横顔の笑顔と背中と思い出を見上げていた。この雨はいつになったら本領を発揮するのだろう。ハッキリしないままのあいまいなやつめ。もっとマジメにやれ、雨よ雨雲よ。

間。

ふと漏らしたわたしの気持ちがタカシを通してあのヒトまで伝わってしまったのは、二週間前の、仕事帰りにSFですかってくらいの虹が青空にかかったあの日だったようだ。そしていま、あと数分も歩けば、四、五分も歩けば、タカシとあのヒトがおなじ建物のなかで待っている。一九二五日と三日と七日ぶり、ざっくりいえば六年ぶり。なのにすくんでしまうこの足。まるでじぶんの足じゃないみたい。かんたんには動いてはくれない。
じつは数日まえ、電車を乗り継いでランジェリーショップを七軒まわって、レースの盛りブラと、ローライズのショーツを選んだ。白とかピンクとかは、色の薄いぶん身体が緩んでみえるので、悩んで悩んだ挙句、オレンジ色の上下にして、ミカンちゃんと名付けて部屋に飾っては眺めてきた。だが男のヒトは下着にあんま興味を示さないだろうし、ブラが硬いことを気にもしないだろう、だが。
いろいろ端折って（はしょって）要約すると、こころが決まらないまま付き合いはじめた男性との結婚を決心した、なのに、わたしのこころにわかに出し抜けに膨れあがってきてしまったのは、あのヒトに会いたい、というキモチだった。それ以来、記憶のなかにますます引き戻されてしまった。ただ若かったあの頃の月日と、異様なくらい激しかった熱情みたいな想いはやっぱり忘れることがなくって、そういった焦げあとはこころにずっとこびりついていた。
しかし、会って、これからいったいなにをいおうとしているのか、なにをいわれ

たいと思っているのか、なぜ会いたいと思ってしまうのだろうかわたしはどうする気なのだろうかどういう顔をすればいいのだろうかこのまま過去にわたしを近づいて行ってよいのだろうか、生きてゆくなかには諦めなければならないものが無数にあるというのにいまさら途絶えてしまったはずの遠い道に、

キリコの傘のなかに、ユリがふいに入ってくる。

キリコ　！　（どうしていいかわからず）――え？
ユリ　――（空手チョップで、すまねえ、とでもいうようなジェスチャ）
キリコ　……
ユリ　こんちは。
キリコ　……え？

雨の音――

ユリ　――
キリコ　……
ユリ　あ、こんばんは？
キリコ　……え？
ユリ　うふふ。おじゃましてます。
キリコ　……

雨の音――

ユリ　これ。折りたたみですね。
キリコ　……
ユリ　おっ、へー。ボタンひとつなんだ。
キリコ　…、
ユリ　いいですね、この傘。
キリコ　（ハッとして）――

奪われまいと、逃げるように歩き出すキリコ。

ユリ　……？

取り残される、ユリ。
キリコ、ずかずか歩いて、突如、立ち止まる。

キリコ　え、ええっああっ！　歩いてしまった。歩き出してしまった！
ユリ　……？

雨の音――

キリコ　（じぶんに問う）どうする？　…一歩さらに踏み出すかわたし？　どうなんだわたし？

キリコ、振り返って、女を見る。が、すぐにもとの姿勢に戻る。

ユリ　……。

キリコ、また女を向く。

ユリ　？

キリコ　……

ユリ　……（ちいさく手を振ってみることにする）――

キリコ　……、……、

キリコ、ぎこちなく手を振り返す。そしてまた背中を向ける。

ユリ　……。

キリコ　（やがて、ひとり合点する）……エールもらった？

キリコ。一歩、二歩、三歩踏み出す。止まる。振り返る。女を見る。

キリコ　（見ている）――

ユリ　……？

キリコ、女に歩み寄る。

キリコ　（鞄をあさり、折りたたみ傘を取り出す）つかって。あまってるから。

ユリ　？　（でも思わず受け取る）

キリコ　ありがとう。

ユリ　？

キリコ、踵を返して向かう向かう。が、突如、立ち止まる。

女のもとに戻ってくる。

ユリ　？

キリコ　――（いま使っている傘をユリに渡す）

ユリ　え？

キリコ　いいほうをあげる。（あなたにも）グッドラック。

ユリ　……？

キリコ、なぜか傘がわりにコートをガバッと頭に被り、向かう向かう。去る。

間――

ユリ、見えなくなった女の背中を見遣っていう。

ユリ　まさかのパターンにまさかのパターンが重なって、傘をいただいただけでなく、ありがとうとまでいわれたなぜか。……、……あの女性は、なぜかゆっくりと去っていったようにアタシにはみえた……。ヒト波のなかに消えてゆくあのヒトは…、あの背中は…、…、いや、世界はひろく、たくさんの問題に満ちている。

もらった傘を見上げて、

ユリ　――

傘の持ち手のほうをみて、

ユリ　（ワンプッシュだ、と口元がいう）

傘のボタンを押す。
すると勢いよく閉じる傘。（ボタンを押すと自動で閉じる仕様である）

ユリ　おおっ。

ユリ、キリコの行方に「グッドラック」とグーサインを送る。

ユリ、傘を開こうとする。
が、手こずる。結構チカラが要るようだ。
開く。うれしい。

ユリ、あてもなく歩き出す。

シーン4　渋谷・バーのある高層ビル・夜

キリコがやってくる。止まる。見上げる。

キリコ　この建物の十五階のバーにあのヒトはいる。

建物内に入る。

キリコ、歩く。まっすぐ歩く。止まる。見上げる。

キリコ　隣とその隣にもエレベーターがある、が、わたしは目のまえのにこれに乗ることにする。たとえ隣がポンなんて古風で間抜けなポンなんて音で扉が開いたとしても。

エレベータがゆっくりと降りてきている――。一〇階から九階、九階から八階、オレンジ色の数字が点いては消えて、点いては消えて、ゆっくりと降りてくる。

この感じが、なんだかわたしのこころのカウントダウンのようにみえている。

パノラマで夜景がビューのバー。夜景なんて、4K撮影の映像をYouTubeでみるだけで充分だっていうのに。あのヒト。あのヒトは十五階にいて、待っている。

音（扉が開く音）。

キリコ　（ドキンとする）

きゅうに無音になる。

間――

キリコ、意を決して、踏み込む。

照明変化。

エレベーターのなか。

キリコ　（十五階のボタンを押す）――三階。四階。五階。オレンジ色の、数字の表示が変わるごとに、ぐんぐんぐんぐん、静かに過去へと引っ張られて、そして近づきつつあって……

沈黙――

キリコ　十五階……。なんの見通しもないのにってのに――。

と、踏み出そうとして、躊躇う。が、意をまた決して、一歩ずつ踏み出す。

キリコ　（じぶんにいう）バカね。バカねえ。本当にバカねえ。

いいながら、去る。

シーン5　渋谷駅前周辺・夜

キリコにもらった傘をさしてユリ、歩いたり立ち止まったりしながら。

ユリ　実家のほうじゃ駅を一周もすればすぐに飽きちゃうのに、渋谷の駅はちがう。歩道橋をあがったり、横断歩道を渡ったり、すれ違う人のだいたいがオシャレでファッショナブルで、若い女の子たちはとくに可愛くって。なんかそういう、まえ向きに明るく生き満ちていそうなヒトたちを眺めているだけでも全然アタシは飽きなかった、し、なるべく今日だけは、やっぱり今日くらいは、どうせ最後だし、もったいつけるように歩いて、いつもより鮮明に、ふだんの景色たちを眺めておきたかった。
街のなかには、あちこちに光が点在している。看板や街頭やクルマのライト、信号機の赤や青、数え切れないたくさんの光が目に入ってくる。浮かんだり、流れたり、漂ったり、明滅したり、明るかったり暗かったり。昼間の光、真夏の光、秋の光、夕暮れの光、目にみえない光。…んや、小学四年生のとき、光は目にみえない、と知った。光そのものをヒトはみることができないらしい。でもヒトは光がなければ物や物体をみることができないらしい。どういうこと？　光は光っていると思っていたからアタシの理解はコペンハーゲン・ニクス的な逆転的にエジソン的だった的に意味がわからなくて天変地異だった。ヒカリ、理科、科学、物理、不得意、分野。
それにしても過ごしやすい夜になってきたと思う。まー、すぐにでもネカフェに入らないととは思うものの、気持ちはいっこうに向かってくれないのだ。まー、いまなら世界一周旅行を予約しちゃうだろう。会社でデスク周りを整理したら、引き出しの奥に「地球を歩こう」なんて本をみつけてしまった。大きな書店の一階の、女性のための実用書が集まってるコーナに、三〇歳までにしなければならないうんぬんカンヌンとか、三十五歳までにカンヌンしなさいウンヌンとか、派手なピンク色の表紙たちがこぞって、大袈裟過ぎるんだよ大文字太文字で、恋愛仕事結婚夫婦妊娠出産貯蓄保険、アッピールしてるンだけど、どれも「美人といえばモナリザでしょ」ってくらい、しあわせのごもっともな価値観を押しつけてて、マ、ごもっともなんですけど、だからアタシは二階の旅行コーナーで「地球を歩こう」を買ったのだった。「しあわせ」のスタイルはコッチにあるような気がしたんだと思う、反動で。買ったくせに、デスクの奥にしまいこんで忘れていた。なにがじぶんにピタリした仕事なのか、それはいまでも全然わかっていない。でも、きっと人生のぜんぶを使っても答えが出せる気もしない。永遠に解（げ）せないテーマなんだろう。マ、なんでも、なんにでも、意味、をつけようとするのが、人間のわるい病だ。意味のわからないことは圧倒的に多いし、意味わからなくていいことだって、セカイにはもっと溢れている。
だけどアタシはどこに向かえばいいのだろうとも思う。みわたす。居場所がないような気がしてきて、一歩ずつ繰り出すごとに、こころが暗くなりそうにもあって、この雨雲のような「暗雲」が、どんどん目のまえの視界に暗さを垂れ込めてきて、それにひきづられそうになって、光を探して（ちょっと間）信号機の青色をみつけて、「進んでもいいんだよ」と優しくいわれた気がして……、ふぅー、

ユリ、去る。
転換。

シーン6　都内・街中・昼

喧騒のなかを歩く、ともえ。
三連休中の渋谷である。

ともえ、駅の改札に入ってゆき、いっぽうへ向かう。

駅のホームに立つ。
駆け込む電車たちの音。

背後にヒトを感じて、振り向く。
一角に、一郎がいる。

一郎　（気づかれて身をひくが）――（見詰めている）
ともえ　――――（見返している）

滑り込む電車の音。大きく、長く――

ふたり　――

この喧騒のなかにカナカナという蝉の声がにじんでくる。
ふたり、歩く。

シーン7　地方・あぜみち・夕刻

ずっと長い直線の道。
ともえ、まっすぐに歩いて行く。
離れて、一郎もついて行く。

ふたり、しばらく歩く。
響き続ける、カナカナの声。

ともえ　（振り向く）――
一郎　（歩いている）――（やがて気づいて、目を伏せる）
ともえ　――（見ている）
一郎　（目を伏せたまま苦笑）――（見返す）
ともえ　（見詰めている）
一郎　（見詰めながら）――

一郎、歩く。ともえのそばまで歩く。そして追い抜いて、歩いて行く。

ともえ　（その背中を見ていて）――

あとを追う。

一郎　（歩く）
ともえ　（歩く）
一郎　（やがてちいさく）フフ。
ともえ　（おなじくちいさく）フフ。

――

ふたり　（それぞれの思いのなかで歩いて）――

やがて並ぶように歩いて、歩いて――

シーン8　山奥・道・夜

ともえ、道に仰向けになる。
そばに立つ、一郎。

ともえ　（目をつむっている）――――
一郎　（それを見ている）――――

ふたり、動かない。
いつまでもカナカナというヒグラシの声が響いている。
とおくに、ちかくに、深い森があるようだ。
ともえ、やがていう。

ともえ　（なあに？という語調でいう）ん？
一郎　ううん。
ともえ　ずっとそうしてる。
一郎　（うなずく）ずっとそうしてる（キミも）。

間。

ともえ　虫の声、すごいものですね。カナカナカナカナ、夜中までお盛んで、わんわん鳴いて、パートナーみつけて。ええどうぞどうぞどうぞ繁殖しなさいしなさいっ、ひとつひとつのその声がひとつひとつのイノチへと繋がってゆく、イノチのバトンなんですから。……（さびしく笑う）だけど、どうかひとりひとりがじぶんの選んだジンセイを歩めますよーに。
一郎　？
ともえ　みんな虫だろうけど。

おおきく息を吸い、そして長く吐く。そして目をつむり、動かない。
死んだフリをしているような、ともえ――。
長い間。

一郎　？
ともえ　――
一郎　ねえ？
ともえ　――
一郎　……

一郎も道に横たわる。仰向けになる。
カナカナの響き――

一郎　（夜空を眺めて）まっくらだ。（やがて空の一点を指し、左へと移動させる）

赤い光。高いところ飛んでるなあ。

間。

ともえ　このままここで、
一郎　ん？
ともえ　ずるずるとね、
一郎　うん、
ともえ　ずるずると、眠りの底に引きずられていったらね、
一郎　うん、
ともえ　……
一郎　ん？
ともえ　（くちぶり大げさにいう）どんなどん底にも底があるってこと。どんな峠にも折り返し地点があるってこと。逆境とはひとつの境地に過ぎないってこと。ものごとのすべては捉えよう次第で如何ともなる、とは思います、けれども、その気、キモチ、がなければ如何ともしがたい、とも思います。
一郎　……はい。
ともえ　（言い切るようにいう）はい。
一郎　……？
ともえ　（抑えていう）死んだらさ、
一郎　……
ともえ　あたしが死んだら、先生、
一郎　？
ともえ　先生は、かなしい？
一郎　……もちろん。
ともえ　（ややあって）へエー。
一郎　……へエー？
ともえ　かなしいんだ。へエー。
一郎　……。
ともえ　なんでって思っちゃう。七年くらい？連絡しなかったんだよ、お互い？　ほんとうはなんにも思わないんじゃない？
一郎　……ときどき気にしてた。
ともえ　ん？　ボソボソ（なに）？
一郎　……（鼻をスンと鳴らして、大きくいう）気にしてた…ときどき……。（胸をさすって）ハハ。
ともえ　……。
一郎　……。
ともえ　フフ。そういうの信じないんだあたし。
一郎　……。
ともえ　いまのべつにウソっぽくなかったけど、（でも）信じない。
一郎　……。
ともえ　はなし。あわせてくれるのとか、そーゆうふうな、なんか、調子あわせて

くれるみたいなの、なんかちょっとね。
一郎　……
ともえ　だけど。そういうところが先生だったなって思い出したりもする。
一郎　……
ともえ　ありがとう。
一郎　…？
ともえ　ありがとうございます。
一郎　……
ともえ　だからこんなことになってるんだろう、と、あらためて関係分析してます。
一郎　…そう。
ともえ　はい。（間あって）さよなら。

ともえ静止する。長く――

一郎　（やがて。起きて、やさしくいう）死んじゃった？

間。

ともえ　（呪文を唱えるようにいう）生まれ変わる。新生児のように。暗闇のなかに溶けるように。ヒカリのなかに放たれるように。――目を開く……

ともえ、落胆のため息――

一郎　死ねないよ。簡単には。
ともえ　（ちいさく）知ってますしー。
一郎　（間あって）（でも）死にたい。
ともえ　（聞こえるか聞こえないかの程度ので、じぶんにいう）…かなしい……
一郎　そう……
ともえ　――
一郎　……
ともえ　――
一郎　（でも）いっときのことだよ。

間。

ともえ　せんせい？
一郎　…ん？
ともえ　奥さんのこと、好き？
一郎　……
ともえ　この世でいちばん好きなヒトは？って聞かれたら、先生は奥さんのこと、きっと選ぶ？
一郎　……だれがするの？　そんな質問。

ともえ　──
一郎　……まあ、たぶん。…うん……
ともえ　ふーん。
一郎　……。
ともえ　ねえ？
一郎　ん？
ともえ　奥さんもそうかな？　奥さんも、この世でいちばん好きなヒトはって聞かれたら、そしたら先生のこと、選ぶのかな？
一郎　え…、（どうだろうという思いで）……
ともえ　──
一郎　……。
ともえ　きっと選ぶよね……。そうあってもらいたいよね……。じぶんが選んだヒトと、ちゃんと深くふかくとっても深く愛しあって、ものすごく好きなまま死ねたら…しあわせだよね……
一郎　……
ともえ　あたしはさ…、真っ先にあたしのこと選んでくれるヒト…いるのかなあ……
一郎　……
ともえ　あたしを…選んでくれるヒト…いるのかな……この…世界で、だれか……
一郎　……
ともえ　──
一郎　そりゃ、いるさ。（これからだって）みつかるさ、
ともえ　（遮って）あたしはおなじ質問、されたらさ…そのヒトだけを選ぶんだけどな、真っ先に……。（だけど、そのヒトはあたしを選ばなかった）あーーーー。鼓動がどくどく音を立てるのが聞こえる。聞こえてしまうよ。しまうんだなぁ…くそう……。…（痛みを和らげるように身体を触れてゆく手つき）……　アー。なんも考えたくない。なんにもしたくない。
一郎　……
ともえ　……それでも生きていかねばならないのがかなしい。
一郎　……
ともえ　いかねば……ネバネバ…トロロみたくネバー、エバー、エヴァー、フォエヴァー。
一郎　…（大丈夫？）
ともえ　……。死んじゃって、死体になっちゃえばなんにも、できないね？
一郎　（間あって）死んだらなにもできないよ。
ともえ　ですね。
一郎　なにも。
ともえ　ステキ。

間。

一郎　ユーウツだよね？　若いと。死にたがる。なにかと。いろいろと。

ともえ　歳を重ねたって、ユーウツじゃなくなるってもんでもないでしょ？
一郎　（苦笑）不思議と多くなる、なにかと。…でも、だけど、いっときのことだよ。
ともえ　……これも（わたしがいま感じる、どうしようもないくらいギューっと絞られているような痛み苦しさも）「いっときの」感情かー。……生きてゆくって…ユウダイですねぇー。（声にならない声をあげて）この胸のうちのポッカリに…あたしはスッポリ…吸い込まれて…しまいたい。しまえばいい。
一郎　……
ともえ　はうあー。（出会えたこと）運命だったって、そう…なんか信じられた初めてのヒトだったのになぁ……
一郎　……

間。

一郎　（苦笑）うまくいえないけど、どんなふうにその彼に愛されたら、満足したの？
ともえ　……
一郎　──
ともえ　……
一郎　ねえ（どうなの）？
ともえ　……
一郎　──
ともえ　……
一郎　──
ともえ　……
一郎　……
ともえ　吸い込まれていいですか。ポッカリに。
一郎　……

間。

ともえ　世界はひとつでしょうか。
一郎　（間あって）いろいろあるかと。
ともえ　あの世はありますか。
一郎　（間あって）あの世はあるかと。
ともえ　（間あって）へー。あるんだ。（間あって）ふーん。
一郎　（うなずいてから、いう）もし。
ともえ　？
一郎　もし、この世、に生き甲斐を探していてむなしい思いをしているヒトがいたとする、
ともえ　…、
一郎　もし、あの世、があったら、そのこころは落ち着くんじゃないかな、すこし

は。
ともえ　（聞いていて）――
一郎　この世の「次の段階」に上がるんだから、だからこそ、いまよりは素晴らしいセカイだと思う。
ともえ　…次の段階……？
一郎　（うなずく）きっと、素晴らしいセカイが待っている。
ともえ　……
一郎　いまより違う、すこししあわせになれる世界が。
ともえ　……
一郎　そうじゃなきゃ「救い」がない。
ともえ　……
一郎　――
ともえ　……よかった。

間。
ともえ、仰向けになる

ともえ　していいよ。先生。
一郎　……
ともえ　――（上着のボタンを外す）野外か……
一郎　……
とも　でも殺してね、最後。
一郎　……
ともえ　首。ん（って）しめるんだよ。…がんばって。
一郎　……
ともえ　いいね？
一郎　……

転換。

シーン9　山あいの宿・一室・夜

女・みふゆ、歩いてくる。
扉を開けて、部屋を見て、

みふゆ　おーっ。（大きく匂いを嗅ぐ）くっさっ。

床をひっかく。

みふゆ　たたみ。うん。

部屋を歩く。
窓に向かう。

みふゆ　ふっふ〜ふー。ここをあけると――――（開ける）真っ暗かいっ。

聞こえてくる虫の声。
山あいの静けさ。

みふゆ　（聞き分けようとする）…カエルの鳴き声？　バッタ？　コオロギ？　（こんばんわ、という具合に）げろげーろ。

部屋を見まわす。そして一点を見ていう。

みふゆ　まだ一〇時……。（じぶんにいう）さてと。わたしはどうしたい？　どうしたいんだ？

静寂。

みふゆ　（部屋にいう）しっかし、なんにもないネなんにも？　湯のみもテーブルもない。座布団もなくて、（別の一点に目が止まり）ふとんだけはありそうで。

静寂。
足元にいう。

みふゆ　おー。靴ぬがなきゃ。

しゃがんで靴を脱ぐ。
その姿勢のまま「んー」と、大きく伸びて、

みふゆ　よっと。

でんぐり返り。
でんぐり返りでんぐり返り。

そこに、扉を開けて、入ってくる男・俊平。
俊平は、両手に荷物を持っている（みゆふのぶんも持っている）。

俊平　……

でんぐりでんぐり返りっている、みふゆ。
みふゆ、俊平にゴツンとあた…らず、部屋の隅まで。
今度は、バックででんぐり返そうとして……できない。
寝転ぶ。天井を見て、

みふゆ　うううううううう…まわるぅ…まわってるぅううう地球がああぁぁ…
（感嘆の声で）おおおおぉぅ。まわってるぅ、まわってるよー。だあー。

ばあ～と、足を投げ出した、みふゆ。

俊平　（見ていて、みふゆに）そうきたか。
みふゆ　お？　きたか。おそいぞ。
俊平　なにでんぐり？
みふゆ　ふっふっふっ。
俊平　…なにふっふっ？

俊平、浮かれたいキモチもあって、ふざけたことをいう。

俊平　おお。おおおおおおっと。みて、ここ。ここの空中にまるでシャボン玉のよ
うに「ふっ」というひらがなが、「ふっ」が、浮かんでるよ？
みふゆ　？

一瞬の間。

みふゆ　（空中にことばを投げるように）ふっふっふっ。
俊平　おおっと、またもや、ここに、ここに、アこっちも。
みふゆ　？　ふっふっふっふっ、
俊平　おっと、おおっと、
みふゆ　ふっふっふっふっふっふっふっふっふっふっヴゥヴゥヴゥヴゥ、、くるしい、、

笑うふたり。

俊平　きたね。
みふゆ　おう。

俊平　さらば東京。の空。雨ばっか降ってバカヤロー。ハハハ。
みふゆ　そら、関係なくない？
俊平　おう？
みふゆ　おう。じゃ出てって。
俊平　お？
みふゆ　着替えます。
俊平　おー。おー。おー。
みふゆ　ほら（出てって）。
俊平　（出て行かず）ねねね。ここ、どこだと思う？
みふゆ　しつこい。どこだっていい。
俊平　教えたい。
みふゆ　聞きたくない。
俊平　おしえたい。
みふゆ　だから、あの世。
俊平　おほほー。
みふゆ　アタリ？
俊平　アタリなもんか。
みふゆ　熱海？
俊平　はい？
みふゆ　熱海でアタリ？　熱海のあたり？　あ、熱川？
俊平　……
みふゆ　…おっ？　マジか、おんせんか。極楽じゃん、あの世じゃん。
俊平　ウム。地獄温泉かもよー？
みふゆ　おほ？　よっし。入ろう。おサルさんのようにあったまろう。反省してます　ねんって。
俊平　反省してるのなんか？
みふゆ　まったくなんも。うん、まったく。
俊平　だいたい、熱海熱川あたりじゃないし、温泉じゃないからね？
みふゆ　はい。だと思ったし、だと思ってる。
俊平　そう？
みふゆ　匂い、海じゃなかったし、そと。
俊平　うん。音もしない。波とか。
みふゆ　まったく。
俊平　うん。
みふゆ　聞こえない。
俊平　クルマ。
みふゆ　ん？
俊平　あてずっぽうに走った。走らせた。
みふゆ　あてずっぽうって、フフ、なんかちょっとヘンなの。
俊平　ん？　なにじゃあ？
みふゆ　しゃかりき。しゃかりきドライブしてた。
俊平　……チャリか？

みふゆ　？（ことばを探して）おちゃのこさいさい？
俊平　蕎麦屋か。
みふゆ　エ？
俊平　え？
みふゆ　おちゃのこさいさいがどうして蕎麦屋になるの？　ときどきヘンなこというよね。
俊平　エ？（ほかに）たとえば？
みふゆ　うーん。（すぐに思い出せず）なんだったかなー・
俊平　（ここまで）三〇〇キロ走らせた。しゃかりき。
みふゆ　距離感わかりません。三〇〇キロって、それって日本地図からはみ出る？
俊平　んなわけ（ない）。
みふゆ　陸地だねー。
俊平　そりゃね。だって考えたってドコ行ったらいいかおれ、わからなかった。わからなかったから、あてずっぽうに走らせた。どうせだったら、おれも、なにもなんにも知らないヨソの土地？行ってみたいと思って。
みふゆ　（うなずく）
俊平　おびき寄せられるようにココに来た。
みふゆ　うん。
俊平　来たんだ、ココに。
みふゆ　ふーん。（見まわす）
俊平　理由はわからない。
みふゆ　へや。なんもないね。
俊平　うん？
みふゆ　素泊まりにしては、なさすぎる。景色もみえなさすぎる。
俊平　朝になればみえるよ。おはようセカイーって。
みふゆ　（また変なこといった、という思いで見て）ふふ。三〇〇キロ。
俊平　ん？
みふゆ　ずいぶん走ったんだね？
俊平　（強くいう）そう。
みふゆ　道路。高速道路なのに道、ぐにゃぐにゃしてた。
俊平　高速道路はぐにゃぐにゃしてないもんだけど。
みふゆ　してたしてた。こんなよこんな。（と、手で示す）　そりゃ途中、あらぬべき魔の睡魔に、意識、さらわれるわけです。
俊平　ふとん（敷こうか）？
みふゆ　しかない。
俊平　座布団どっか（ないかな、とあたりを探す）
みふゆ　眠くないし。
俊平　？
みふゆ　ちっとも眠くないし。
俊平　おれは？
みふゆ　眠いのか？
俊平　まあな。

みふゆ　ずいぶん走ったからな。
俊平　そうよ。ふとん（しくよ）。
みふゆ　もちろん。勝手にどうぞ。
俊平　……。「東京の空はもっといっそ真っ暗でいい真っ暗がいい真っ暗であるべきなんだ」なんて突如悟ったような、メルヘンなのか哲学なのかただのJポップなのかわけのわからない、でも本人だけみょうに神妙で「な、斎藤俊平？」なんていうからオレ、なんか駆けこんでレンタルカーしてカーしゃかりきしゃかりき？するってわけで。
みふゆ　はい。おととい確かに（いいました）。
俊平　禁煙車残ってないんでいいですかって店員にいわれてなんで残ってないんスかって聞いたら「そりゃお客様～」と、いわなくてもわかるだろテキな沈黙の無言でやりこめられてオレ。なくなく喫煙車を借りてきたってのに店長は乗ってすぐに「くっさっ」「メチャくっさっ」といい放ったわけで。
みふゆ　なし。それ。
俊平　ん？　なに（が）？
みふゆ　店長。
俊平　店長（が）？
みふゆ　うん。
俊平　じゃあ、なに？
みふゆ　なまえ。なまえで呼んで。せっかくなんだし。
俊平　（間あって）桜井さん？
みふゆ　ううん。
俊平　みふゆ？
みふゆ　さん付けろ。コラ。
俊平　（思わず笑う）
みふゆ　しゅん。いくん。
俊平　……。
みふゆ　ん？
俊平　…なんか、いや、ううん。なんかむずがゆい。
みふゆ　うん？
俊平　そう呼ばれること。
みふゆ　うん？
俊平　こんなふうなことも。
みふゆ　そお？
俊平　そお。
みふゆ　そお？
俊平　そだよ。（小さく息を吐く）まったく…（だって）ひとまわり上だからさ。いちおう。
みふゆ　まあねー。
俊平　（まあねじゃなくてさ、という思いで）まあねって。
みふゆ　テメーを採用したのは？
俊平　（そりゃ、まあ、あなた、と手で示す）

みふゆ　ふっふっふっ。なめんな店長。
俊平　くー。
みふゆ　あ。その顔。（その顔で）思い出した。
俊平　？
みふゆ　面接のとき。「オレ、十五年以上、ひとり暮らしやって」、
俊平　ちょ、それ、おれ？（似ていないという思い）
みふゆ　そう、おれ。（笑う）「十五年以上ひとり暮らしやってきて、目玉焼き、メッチャくちゃキレイに焼くコツがあるんスよ」
俊平　あー。うん。こうね。

俊平、こうやるんだよ、とやってみせる。
卵をフライパンに落とすところの動作が、異常なほどスロー。

みふゆ　（すごく笑って）ばかだよね？
俊平　キレイにできっからホント。
みふゆ　やりません。（からかいたくていう）も一回やって。
俊平　……、だからこう。（やる）
みふゆ　（また大笑いして）ばかだよねー。
俊平　それいいたいだけじゃん。
みふゆ　（笑っている）
俊平　あーあーあー。バカにしてろ。
みふゆ　ひもじい感じ。
俊平　ほっとけ。
みふゆ　そのテクお店でやったことある？
俊平　だいたい（オレ）ホール（採用）じゃん。
みふゆ　（あはは、と高くたかく笑う）

俊平、逃げるように、窓を開ける。見渡す。

俊平　ほんとだ。なーんもみえねえ。

俊平、真っ暗な外の景色を、詳しく眺めようとする。
みふゆ、その背中を見ながら、ズボンをめくり、ふくらはぎを出す。両足とも。

俊平　（窓を閉める。向いて）……？
みふゆ　もんで。すっごくむくんでんだ。

間。

俊平　運転したのオレじゃん。
みふゆ　おう。
俊平　爆睡してたよね、途中から？

みふゆ　おうまあな。
俊平　むしろ、ついさっきまで爆睡だったよね、あなた？
みふゆ　おうドライブうまいからな、つい。おう。
俊平　おう。
みふゆ　おう。
俊平（さっきの、みふゆを真似て）こんなんだったの、走ったんだけど？
みふゆ　おう。ごくろう。
俊平　そうよ。
みふゆ　おうおう。（強くいう）おう。
俊平　おれがもまれたいわー。
みふゆ　（足を投げ出す）ほら。ほれ。よーくみて。あたしのこの足は、すでに死んでしまいました。死んでおります。（か細い声でいう）たすけて～。
俊平　……

間。

俊平　くつした、履こうよ。
みふゆ　え？　は？　靴下？　…あるけどいちお…あっちのかば、
俊平　ふんにやあああー。（ゆるゆる、うしろに倒れて、寝そべる）
みふゆ　んん？
俊平　うん？
みふゆ　んんん？　まさか帰りたいとか思ってる？
俊平　（間あって）なにいってんの。
みふゆ　うん。まさかとは思ったけどね……。（もう一度聞く）帰りたい？
俊平　そんなことないよ。
みふゆ　…そんなことない…かぁ。
俊平　そんなことない。
みふゆ　……ごめんね、わがままいって。ひとりヤだったんだー
俊平　ううん。

沈黙。

みふゆ　（ちいさく）さて。…どうしよっかね？
俊平　……
みふゆ　……
俊平　べつに……、べつに、なにかしなきゃと思わなくていいんじゃないかな。
みふゆ　？
俊平　オレ。一緒にいるし、いるけど？とにかくゆっくり過ごせたらいいんじゃないかな。
みふゆ　……そだね。
俊平　ヒトはさ、なにかをかえたいときでも、かえるためばかりに行動するってわけじゃない、と思う。つまり、なにかをするばかりじゃないんじゃないかな、と。（いって

て恥ずかしくなり)フ、なにいってんだか。フフ、なんかね？ひとりでクルマあれしながら、そんなことズッと考えてた……
みふゆ　だけど……、ジッとばかりしてるのもツライ。ジッとしてるほうがシンドイ。
俊平　……
みふゆ　もうどうしようもないって、わかってるのにジッとなんか…そんなのなんか、
（言い切るようにいう）イヤなのです。
俊平　……まあね、気持ちわからなくないけど。
みふゆ　――
俊平　……
みふゆ　フフ。
俊平　ん？
みふゆ　おかしいのわかってんだけどなー。じぶんでも思うよ？　だれみても、あいつがいいなって思っちゃうのナゼだろうって。電車ンなか、ああ、いっぱい男のヒトがいるなー、なんてズラズラみていって、でもあいつよりステキなヒトいないなーって、
（そういうふうに）思っちゃう。フシギ。
俊平　（みふゆを見て聞いていて）――
みふゆ　いないと生活、からっぽのような、ものすごくさびしいような……(だんだん想いのなかに沈んでゆく)……
俊平　……

沈黙。

俊平　すぐ近く、遊園地、あるんだって。こんな(だいぶ)ちっちゃい観覧車、あと、そこそこのジェットコースター。なんだったら気ィ晴らせるかも。
みふゆ　(さびしく笑って)こども扱い。
俊平　フ、
みふゆ　そんなちっちゃいそれ（観覧車）じゃ、十秒じゃん(乗ってから降りるまで)。
俊平　（い）や、サイズこんなで十秒じゃ、目まわるだろ。ぐるり、ポン。くらくら～。
みふゆ　目まわるの平気。
俊平　(い)やいや。デングリかえってスゴかっ、
みふゆ　（急に大きく）しゅんぺい！
俊平　…へ？
みふゆ　（大きく）しゅんぺい！
俊平　ん？
みふゆ　(真顔でゆっくりいう)しゅんぺいくん。（見ていて）――うふふ。
俊平　？
みふゆ　わきの下、くすぐっていい？
俊平　……はい？　だめだめ。
みふゆ　ありがと。

みふゆ、くすぐりにかかる。

俊平　ちょちょちょちょちょオちょちょちょオチョチョチョチョチョチョ、、、、（逃げる）
みふゆ　あ、どこ行く。（おい待てー、と追う）

追いかけあうふたり。
部屋を出て行く。

みふゆの声　おりゃおりゃー。
俊平の声　ひー。
みふゆの声　（笑いながら走っていて、さらに加速して）――
俊平の声　ひーひーひー。（捕まって）ハウッツ。（羽交締めでくすぐられて）ウォちょちょちょちょアハアハアハハハハやめてやめてやめてゴメンなさいゴメンなさいゴメンくださいゴメンどうくださアッあっあっイテッ、
みふゆの声　あっ。

形勢が逆転した模様。

みふゆの声　おっ。
俊平の声　このこのこのこのおりゃおりゃおりゃおりゃオチョーちょちょ（みふゆに逃げられて）あ待て。ちょ待て。おりゃどりゃー。

駆けて、部屋に戻ってくる、みふゆ。
追いかけて、部屋に戻ってくる、俊平。

ふたり　（大げさに息が切れて、ゼーゼーして）――――

ふたり、ばーっと、つかず離れずの距離で、寝っ転がる。
ふたり、息切らせながら、

みふゆ　なーんか。
俊平　ん？
みふゆ　いいね、こういうの。
俊平　うん。年甲斐もない。
みふゆ　こども。きゃあきゃあなんかして。
俊平　（ほんと、という思い。笑って）廊下やたらなっげーの。な？
みふゆ　（笑う）
俊平　（笑う）
みふゆ　さっきの。
俊平　ん？
みふゆ　オチョーってなに？
俊平　フフフ。空手。
みふゆ　？　カンフーでしょ？
俊平　ふっふっふっ。

みふゆ　やってたの（空手）？
俊平　むかし過ぎて。
みふゆ　ふーん。

だんだん息が整ってきて、天井を見続けながらふたり、やがて――

みふゆ　ちょっとホンキ出した。くすぐるとき。
俊平　……そうかも。
みふゆ　うれしかったよ。
俊平　……。
みふゆ　どさくさにまぎれて、さわっちゃいけないとこ、さわってきた。
俊平　……触れちゃっただけだって。
みふゆ　あんくらい、
俊平　ん？
みふゆ　全然いいよ。
俊平　……
みふゆ　いいよ、ぜんぜん。
俊平　……
みふゆ　――

沈黙。

俊平　――

俊平、起き上がる。みふゆに背中を向けて、

俊平　……

みふゆを見て、俊平、

俊平　……

みふゆを見ている――
転換。

シーン１０　キリコのひとり暮らしの部屋・深夜

キリコ、部屋着で。

キリコ　あのヒトは、わたしの心象のままだった。思ってた通り、いまも変わっていなかった。（間）どうかこのまま「あのヒト」と呼ばせてほしい。「架空の色合い」で呼びたい。あのヒト。あのヒトの声。
青春という年齢を超えて、朱夏という人生の季節に踏み込んだ。同級生の多くが子育てに忙しかったり、仕事に忙しかったり、そのどっちも両立させてなお忙しかったりする。わたしだってわたしなりにじぶんの闘う場所をみつけて、小さい会社で鞄をつくって、でも社会に根を生やす積もりで働いてきた。手仕事のひとつひとつの仕事がわたしの人生に意味を与えると思っていたし、信じていたし、信じられてもいたから、じぶんの指先を走らせてきた。けれどいつしか、それも虚しいと感じるようになった。仕事を選んで恋愛を取らなかったわけじゃなかった。わたしはめっぽう愛されるタイプじゃないけど、男性経験がないわけじゃないけど、ほとんど閑古鳥だった、いいかたヘンだけど。男のヒト欲しくなったりするけど、適当なだれかと適当に触れ合うことはしない。尻軽で弱い人間みたいで嫌だから。充実した恋愛経験やセックスがあれば、このまま歳を重ねてゆくにつれて高まる後悔みたいものが減るような気もしている。だれかと一緒の人生を選びたい……。

キリコ、電話をかける。声のみで鳥子が登場。

キリコ　ひさしぶり。覚えてる？
鳥子　あーウンウン。覚えてる覚えてるよ、ひっさしぶりだねー。え、どうしたの？
キリコ　ひさしぶりね。
鳥子　ほんとびっくりしたー。画面にキリコの名前出てるんだけど、だれからなのか理解するのにちょっと時間かかっちゃたわー。
キリコ　どうしようかなって迷ったんだけど、
鳥子　え、なにを？　え、迷ったってなにが？
キリコ　こんな時間に電話したら迷惑だろうかと。
鳥子　むしろ、だれか死んじゃったって連絡かと思った。
キリコ　そうじゃない。
鳥子　あーよかったー。もうこんな歳じゃん？　ありえるからね訃報の電話。このまえの同窓会でもさ、上田くんが肺がんかなんか？病気で亡くなっちゃっていうじゃん。佐々岡くんもいつの間にか死んでたでしょ？　あーよかった。ぜんぜん眠気すっ飛んじゃったー。でもさ、深夜二時にかけてきて知らせるほど、共通の仲いい友達なんていたっけ？
キリコ　…どうだろ。
鳥子　いないいない。え、いつぶり？　同窓会、来てたっけ？
キリコ　行ってない。
鳥子　じゃ、なん年ぶり？　てか、アハ、なん年ぶりに話してるんだウチら？（笑う）
キリコ　年賀状の写真じゃ毎年会ってる気になってるけど。

鳥子　あー。キリコにも送ってたんだっけ？
キリコ　長野で結婚して、子供ふたりでしょ？
鳥子　そうそう。え、アタシもらってるっけ年賀状？
キリコ　数年に一度くらい（送ってる）。
鳥子　ちょうだいよ。え、いまなにしてるの？
キリコ　東京でまだ働いてるよ。
鳥子　まだって、なにしてんだっけ？
キリコ　鞄つくってる。
鳥子　あ、そっかそんな地味だったよねたしか。
キリコ　デパートでも売ってる。
鳥子　へー。
キリコ　……。
鳥子　ね、子どもは？
キリコ　……。
鳥子　ん？
キリコ　結婚もまだ。
鳥子　へー。じゃ相手は？
キリコ　相手って？
鳥子　結婚の。
キリコ　…たぶん、
鳥子　たぶん？
キリコ　もうじき？
鳥子　へー。子ども産みなよ。

キリコ、電話をいったん離して、いう。

キリコ　年賀状が届いてなかったら、きっと思い出すことのない顔の相手と、こうして急に電話したりする。一緒の学校で、おなじ制服を着ていたとしても、もう忘れてしまって、思い出すことのない相手。それでもいいから、いま思っていることを吐きだしたくて電話をしてしまう。スポンジのように吸収するだけ吸収して、わたしを受け止めてくれる相手に、いつも電話、かけられたらいいのだけれど……。友達と呼べるヒトが極端に少ないのは、わたしの日ごろの振る舞いのチリのやま。今夜みたいな相手と話すと、不愉快にもなるが、相手の記憶のなかのわたしの生存確認？もできてそれはそれで、安心したりもするが、またね、とか、今度会おうよ、とかいってもらえることがない……。

キリコ　（鳥子にいう）こんな夜中に電話してごめんなさい、急に。
鳥子　（裏腹をいう）そんなことないよ。嬉しかった。ありがとう。（切る）
キリコ　……。

キリコ、電話をゆっくり耳から離す。
転換。

シーン11　山奥・道・夜

ともえ、一郎。後刻。

一郎　ぼくは、生きてさえいればいいという意見には、疑問を持っているほうでね、
ともえ　――
一郎　生きて、それでどうすればいい――と。
ともえ　――
一郎　（意味を見出せないままの生は苦しいのを思うと、クスッと笑って）
ともえ　…笑った。
一郎　（グス、グスグスッと笑う）
ともえ　……

やがていう、

一郎　浜辺だったとする、ここが。たとえば、キミの目のまえにいま、青緑色のとろりとした海があって、波は穏やかで、ぜんぜん海らしくなくて、まるで湖をみているような浜辺――、そこにクジラが座礁している。実物をみたことがないから、うまく説明できないけど、大きな灰色の、なんとなくテカテカしたゴムチューブのような。時折、弱々しく潮を吹き出して、見物人たちを「おおー」と、どよめかしたりなんかしている。クジラ。
ともえ　はい。ジョゼと魚って映画のクジラ、イメージしてみます。
一郎　ジョゼ？
ともえ　クジラを海に返そうとするんだけど救助活動ぜんぜん捗らなくてってところあるから。
一郎　そう。
ともえ　ん、ジョゼじゃないかも…でも（まあ）はい。
一郎　電池は？（とスマホの仕草）
ともえ　ないもう。
一郎　ぼくも。
ともえ　（はいどうぞ、という語調で）クジラ。
一郎　そう。座礁したクジラは、もし海に返せても、生き残れる可能性は低いといわれている。水中じゃないところじゃ身体も重いから、内臓が圧迫されて呼吸は困難でどんどん弱ってゆく。クジラの皮膚は、人間のように角質層がないから、空気に晒され続けると、身体の表面が焦げるように火傷してゆき、剥がれてゆく。「ヤ、でも生かしてアゲルべきだ」そう救助するのは悪いことじゃない。なにもしなければ、死んでゆくだけだ。が、生かしておくべきと考えること自体は、ずいぶん手前勝手な意見であり感情でしかない。感情なんてものは所詮、雲のように流れてゆく。生かしておくべき、いうのは簡単だが、どうして生かしておくべきなのだろうか。だいたい、ヒトはクジラにずっと付き添っていられるわけじゃないし、座礁をただ迷惑と考えて海に返そうとするヒトだっている。自治体なんかは対策本部つくらなきゃならないし、死体処理には数千万円かかるらしい。だけど、本当のところ、ただ迷い込んだのか、海で

疲れ果てて死にに来たのか、クジラのほんとうの気持ちを知っているのはだれもいない。動物だからわかりようない。

ともえ　……助けたくなるのは、相手が、クジラだから？

一郎　たとえば、ミミズだったら。

ともえ　み……？

一郎　たとえば犬だったら。猫だったら。鳥だったら。

ともえ　タヌキ。

一郎　ふつうは、目のまえで苦しんでる動物がいたら救ってやりたいと思う、ふつうは。でも自然のなかではそのまま死ぬべきなんだ本来。死んだタヌキを他の動物が食べたりすれば土に還る。そのことで森が育つ。死は決して無駄ではない。それがいわば自然のサイクルなんだ。動物を救うというのは、人間がそのサイクルに干渉しているだけだ。仮に相手がクジラだからといって、海にとってみればなん万頭いるクジラの一匹だし、クジラが死ねばプランクトンや魚たちが食べて生態系のようなものは保たれてゆく。そもそも彼らは超音波で陸と海を区別していて、耳が聞こえなくなったから座礁してしまう。海に帰っても、生きてはゆけない、やはり。

耳も目もないミミズはどうだ。真夏のアスファルトの上で、干からびていたり、乾いてしまったアレは。あれを見掛けたって、ぼくらは手を出しもしない。鞄にペットボトルの水を持ってたりするのに、助けてあげようともしない。あいつらに水をかけてやろうとはしない。真夏では土のなかの酸素が足りない。生きやすさを求めて這い出てきてミミズは、結果的にはあんなふうに、白く焦げてゆく、道端で。それでもアリなんかが食べてくれて土に還ってゆく。

相手が違うと、動く感情も違ってくるのは認める、が、どうにかしようなんて思うことがあったりなかったり、所詮、勝手なんだ。動物を、人間の物語や人間の感情に重ね合わせちゃいけない。あっちにはあっちの世界があって、あっちのルールのなかで生きている。灼熱のミミズも、座礁したクジラも、どちらも動けなくなってただ死んでゆくのを待つ、死ぬのを待つしかない。いや、海のなかや土のなかで、もうじぶんが生きてゆけないことを知り、自殺するように死にに来たのかもしれない。

ヒトだって遅かれ早かれ死んでゆく。ほんのわずかな可能性でもあれば、つねに前にまえに進まなくてはいけないのだろうか。まえに進む努力を諦めてしまうのは悪いことなのだろうか。ぼくは…一緒に住んでいたカメが死んだ……。ぼくはここにきて、足掻くばかりじゃどうにもできないことたちと、どのように向き合っていくべきかと考えてしまった。アタマのなかを深く支配し駆けめぐる思いは…なにかを断念したり、諦めることは、よりよく生きるための選択だとさえ感じ始めている。だって、遅いか早いかの違いはあれども、死は、万人に平等にやってくる。ぼくらはだれでもみんな、永遠にまわり道をしているだけのような存在といえなくもない。

どうせ死んだってだけど、死んだことにはならない。じぶんを記憶し、覚えてくれるヒトがいる限りにおいては、完全には死なないし、死ねない。そのヒトたちのなかで生き続けることもでき、生かされ続けたりもする。じぶんひとりの死は、つまりは完全な死にはならずに済む。ほんとうの死と、その死の怖さとは、じぶんを知っている人間がこの世にまったくだれもいなくなることのほうなのだと思う。

間。

ともえ　静かですね。
一郎　――
ともえ　不思議です。死ぬのをまえにして、恐怖がありません。
一郎　――
ともえ　ね、せんせい。

ともえ、一郎の足首をつかむ。

一郎　（掴む手を見て）……（ヒヤリとするクチっぷりで）――じぶんを縛っている鎖みたいなものから解き放たれて、死というものは安らぎを与えてくれるのだろうか。
ともえ　……
一郎　重い荷物を下ろしたときのように――
ともえ　せんせい……？

一郎、ともえから離れる。

一郎　ぼくはただ、身体を触れ合うように、交わしたいと思ったナニカを。生殖活動に繋がらない欲求なんかを排出する煩わしさたちからはもう、どういうわけか解放されてしまっていてね。気力が湧き起こらないんだ。むかしはキミのまえで、自制していた。距離を置いておかないと、なにかしてしまいそうだった。無茶苦茶に抱きついちまいそうだった。なのにともかく、踏ん切らないまま、しれっとあの部屋で十二ヶ月過ごしていた。（ややあって）無事合格おめでとう、第一志望だってね。
ともえ　いま（さら）？　フフ、とっくに卒業。
一郎　うん。
ともえ　知らせたいのに、（ダイヤル）かけてもあのころ繋がらなかった。
一郎　そうだね。
ともえ　逃げた。怖がったね。
一郎　そのとおりだ。
ともえ　…意気地なし。度胸なし。
一郎　うん。
ともえ　ハー。番号、でもいまも変わってなかった。
一郎　電話もらって。
ともえ　うん？
一郎　話、深くなって。
ともえ　うん。
一郎　フ、よっぽどだと思った。惚れた男に袖にされたくらいで、死ぬなんていうだろうか、ふつう。けど、星がみたいといった。翌朝確実に死ぬとわかっている特攻隊員たちは、降るような星空がみたいとだけいったと聞いたことがある。たったそれだけのことばに、いく万もの思いを込めて翌朝を迎えたという。そんなことがフッと思い出されて。あながちキミはもしかしたら、よっぽどなんだと思った。
ともえ　（苦笑）うんざり、じぶんも。

一郎　どうしていまぼくが。単なるオンナのズルさかもしれない。
ともえ　……。
一郎　かまわなかった。ぼくを呼び出したい理由がキミにはある。そこを深入りして知りたいとは思わない。けれど、キミがだれか、ヒトを求めていてそれが、たまたまぼくだった。ちょうどいいと思った。
ともえ　…ちょうどいい？
一郎　歳上がこんなことをいうとキミは笑うだろうけど。
ともえ　笑わない。
一郎　ぼくを殺してくれないかと思った。
ともえ　……
一郎　殺してくれる？
ともえ　……

間。

一郎　ぼくは、ぼく自身の始末に困っている。人間というものは結局のところ、理屈や理論ではなく、感情で動く。もしキミが本気なら、ぼくが殺さずとも、ひとりで勝手に死ぬと思ったし、だからキミとは、心中のように一緒に死ぬなんてことはないんだろうと思っている。だけどぼくのほうはもう、捉えがたきものへのおびえのなかでジリジリしてゆくのがイヤなんだ……。人生が果てしなく豊かになってゆく気がしない。いっときは、なんのために生まれてきたか、その真実をみつけて、つかんで、その圧倒的な喜びとしあわせに感動する経験を味わった。その記憶は永遠のものだろう。あれ以来いつしか、そう、いまでもはもう、朝と夜の境目もわからなくなって、今日も明日もやってこなくて、じりじり、ジリジリと、老いさらばえてゆくにも、まだ、充分にあまりまる毎日のなかで、たのしめなくて醒めてゆく、そんな、嘘ばかりの日々を送っている。こんな退屈しのぎの経験しかできずに死んでゆくことを思うと、もう、嘘だらけの人生にさっぱり別れを告げたくってね。
ともえ　……
一郎　たとえば大きな包丁でも持って来れたらよかったんだけど、ふいの職質喰らったら、説明きかないだろうから、ぼくは両手で思いっきりじぶんの鼻をつまんで死ぬまで離さないから、キミはぼくの首を死ぬまでチカラの限り絞め続ける。
ともえ　……滑稽ですね？　そんなで殺せますか？
一郎　…でも真剣なんだよね。……（遠くを見遣る）……この道をずっと奥へ行かずとも、ぼくの「闇」は暗くて深すぎる……。

沈黙。

ともえ　せんせい？
一郎　――
ともえ　せんせい？
一郎　（見て）――
ともえ　（怖いと感じて）……乾いた眼をしてます。その顔はなんですか。どんな顔で

すか。
一郎　……さあ…（スンと鼻を鳴らして）水臭い…顔？
ともえ　…笑えません……
一郎　（背中を向ける）どうあっても、女のヒトは生きたほうがいいよ。男っていうのは、生と死を、どうも二極化して捉えて、死、のほうへ魅了されてしまう性質なのかもしれない。だけど、女のヒトはでも、生と死のあいだに「いのち」を捉えることだってできるし。
ともえ　いのち…あいだに……
一郎　――
ともえ　…触れてもくれないんだね、いまでも……
一郎　……。どうせその彼もぼくみたいになるよ。思い出すこともなくなる。
ともえ　どうせって……。先生は…傷んでいます。濁ってもいますね。
一郎　……。（ポケットから紙を出す）ずいぶん汚れちゃったけど。（渡そうと）
ともえ　（受け取る）字……。

一郎、ともえから離れて、やがていう。

一郎　電話。だれからもかかってくることがなくってね。友はいるけど、ずっと疎遠だし、回線は国中、世界中に繋がってるはずなのに、だれひとりも、ぼくに用事がない。呼び出さない。ぼくだって、だれひとりとしてかける相手がない。妻なんてとっくのむかしに出て行った。最後の最後は「相変わらず変化のないつまらないヒト」いい放ってった。たしかにぼくは面白味がない。変わった趣味もないし、平凡だし、女のヒトを惹きつけるところも少ない。キミから電話をもらって、フ、ハハ、うれしかったんだ。思い出してくれるんだな。家庭教師とはいえ教え子だ。役に立ちたいなんて、電話もらってすこし、浮かれた。のぼせるくらい浮かれたんだ。静かに。ひとりで。六畳のアパートで。（さびしく笑う）頼りにしてくれるだれかがいた、いる。まるで花火だった。笑おうとしたら笑顔が顔に馴染まなくて筋肉が引きつった。

間。

ともえ　せんせい？
一郎　――

一郎、答えない。奥の暗闇へ去ってゆく。

ともえ　せんせい？

沈黙。

ともえ　――（暗闇のなかへ）消え入るようにいなくなった。

沈黙。

ともえ　先生は本物だったのですか。あたしがつくりだした夢の先生ですか。こうだったらいいという幻のヒトですか。

沈黙。
ひとり残された、ともえ。
照明、以降じわじわとさらに暗くなる――

ともえ　（紙を開く。目を通す）字……。「人はそれぞれどのようにごまかそうとも自分自身のその時その時の苦しみを自分自身で見つめ、問いかけ、乗り越えてゆく他に生きる方法を持たない」……（実にさびしいことだと思ってしまう）そうでしょうか……。（違うと思いたい）

沈黙。長い沈黙。

ともえ　目を閉じる。
深い暗闇に波の音が聞こえる。
真っ暗な海。
吸い込まれそうなくらい、黒くて深い、明かりひとつない。
ここが山なのか、浜辺なのか、高台から真っ暗い街を見渡しているのか。
目を閉じたあたしの目に映る景色は、光景は……。

沈黙――
スマホを取り出す。

ともえ　電池はとっくに切れている。それでもあたしは打つ。できたら、とか、もし良かったら、とか曖昧な表現を抜いて、なるべく、なるべく、まっすぐに、ことばを打つ。打ち込む。打ち込んでゆく。指がふるえる。「どうしても会ってください」。命がけでボタンを……押し切る。…電池はいってないのに、勇気を出した。出した……。

ブツンと停電のような、
「暗」転――

シーン１２　山あいの宿・深夜

真っ暗である。
声のみ。

みふゆ　仕事帰り、だいたいコンビニでビールを二本買う。ビールはゴクゴクと音を立ててゆっくり飲み干して、ふふ、部屋に帰っちゃうと、なにもかも億劫。顔と身体、お酒でぼーうっとあったかいなって感じられてきたら、フローリングの床にごろり横たわって、天井をみあげる。あったかくも冷たくもない、堅いだけのフローリング、焦げ茶色。ごろりと身体を横に向けると、ゴロリって響いてくる。なんの音もしない、しずかな夜。身体から剥がすようにジーパンをゆっくり脱いでゆく。手を背中にまわしてホックをはずす。しめつけられてた身体が、ゆるーくなってくのを、じわじわと感じる。また身体をごろりする。床にこすりつけてみたりもする。そんなふうに寝そべったまま、どこで眠気がおそってきたのかも自覚ないまま、知らないうちにぐっすりと眠ってしまう。眠ってしまう。そんな毎日（過ごしてる。送っている）。

俊平、なにか音を立てる。

みふゆ　ん？
俊平　タバコ、いい？
みふゆ　吸うんだ？
俊平　（苦笑）じつは。カラダ。
みふゆ　どかない。
俊平　（笑って、んー、とみふゆを押す）

鞄のファスナーが開いてゆく音。
真っ暗ななかに、ピカピカ光るホタルのような、電子タバコの光――

みふゆ　（ちょっと笑う）電子タバコかい。
俊平　――（吸っていて）

やや間。

みふゆ　（意外という思いをのんでいう）夜勤明けだって吸ってなかった。
俊平　時々だから。
みふゆ　（間あって）そういう姿みせないようにしてたんだ？
俊平　……
みふゆ　ガード固いんだね？　本当のところみせない。
俊平　べつに。
みふゆ　フフ。
俊平　なに？

みふゆ　ミステリアス気取り。
俊平　（笑う）か？

照明じわじわ入ってくる――
ふたり、ふたつの布団をまえにしたまま壁にもたれて並んでいることがわかる。

みふゆ　フフ。（このタバコの匂い）知ってる。おなじだなこりゃ。

みふゆ、話したくていう。

みふゆ　あいつと暮らしてたときは、いればなんにも考えなくて済んで、いないと落ち着かなかったりしてた。（だけど）あいついなくなって、部屋、ぽっかり空っぽなスペースあるのに、でも、ひとりじゃ落ち着かないなんてこと、意外とないなー、ないんだなあーってことに気づかされて…なんか…ふふ、むなしくなった。生きてくってはかないなー、あっけなさ？あさきゆめみし？みたいなの、ツーンとコメカミからハラワタまで走ってきて…なんかズーン身体にこたえてきた。（間）でもだけど。やっぱりでも。さむいんだよね、夜。雨の音が聞こえて、夜中に目、覚めちゃったりすると、活き活き生きるってどういうことなんだろうって、つい真剣に考えちゃう。きゅうに孤独？がモクモク膨らんできて、こころ細くなってきて、どんどん下向きな気持ちになっていく。…あいつはさ、もっとイイしあわせみつけて（部屋）出てって、部屋に残ってるわたしは、わたしはこの先いままでよりもすこしでもしあわせになれるのだろうか、なーんて考えてしまう。（間）でも朝になればケロリ、仕事向かって、おはようございます、なんてアルバイトスタッフのまえで朝礼なんかしてる……。（俊平に）ちょうだい。
俊平　え？　吸うの？
みふゆ　へへへ。
俊平　（新しい一本を取り出そうとし）
みふゆ　それでいい。
俊平　え？
みふゆ　それがいい。
俊平　（吸っていたタバコを差し出す）
みふゆ　（受け取って、吸って、吐いて――）おー、やっぱタバコ。あいつキンエンできたのかな。（さびしく笑う）
俊平　（間あって）知らなかったな。
みふゆ　そういうもんですな。
俊平　（苦笑）

やや間――

みふゆ　はああー。仕事。このまま続けていったって、男のヒトとちがって、努力してもそれでじぶんの人生、開けてくるって感じ、あんましない。わたしみたいに、駅前じゃなくて、国道沿いでもなくて、中途半端な位置にあって駐車場もそれほど

大きくない、パッとしない土地の、パッとしないお店まかされるなんて場合とくに。他の店舗と比べたら、うちの売上の規模、ぜんぜん少ないの。同期のなかじゃ、だんぜん少ないの。しかもずっと、そういうパッとしない店舗ばかり転々と任されてるんだって。…なんか、それ知ったとき…ちょっとだけ恥ずかしくなった。なっちゃった。わたしってそんな、ちいさくてちっぽけな売り上げの店舗ばかり転々とまかされ続けきたんだなーて。ちっぽけ担当。（切なくて笑う）わたしがんばってるんだけどな……。大学ン同級生なんかじゃさ、ずっと都心の有名な企業でかっこよく働いてるの、結婚して子供産んでるの、親の介護やってるの、いろんなのいて、みんなわたしなんかよりもずっとずーっと苦労してそうなのばーっかり。わたしだって身体壊しながらしがみつくようにがんばった頃あったけど…でも実際のところちっぽけ店長。

…でも、それでも、じぶんのショウには合ってるんだけどさ、だから続くんだけどさ、だけど…このまま続けていってもなーって、やっぱりそういうこと、思っちゃうわけ。仕事も、恋愛も？パーッとしなくて、このまま生きてゆくかもしれないって思うと、フフ、たまらなーく不安になる。…はーあー、もうイイ歳。イイ歳して、恥ずかしいような、いろんなことどうでもイイような。（ごまかすように笑って俊平に）あ。いまの話、他のスタッフにいってダメあるから。

俊平　いわないよ。いわない。

みふゆ　そう。フ。よかった。

俊平　だいたい物腰柔らかくのんびりうなずいてるだけだし。

みふゆ　ん？　休憩室？

俊平　そう。

みふゆ　温厚。

俊平　長続きしたいので、出しゃばらない。

みふゆ　気にする？

俊平　仕事の話、学校の話、友達の話、家族の話、子供の話、休みが取れたらどこ行きたいか、フムフムふむふむ。

みふゆ　うなずいて、あんまオレに深入りするなって線ひいて、押し切る。

俊平　防いでる。じぶんの詳しい話、湿っぽい話ばかり出てきそうで防いでる。…けどみんな、本音で向かい合って、本当のこと、聞かないでくれて助かってる。（苦笑）でもクチでいわないだけで、それこそ眉をひそめて、こころのなかじゃいろいろ思ってる。

みふゆ　（穏やかに笑って）そうかもね。そうだろうね。

俊平　（苦笑）だけど、おれ、あんま他人と比較するのヤンないんだ。ヒトはヒト、おれはおれ。オレはこうなった。お前は違う。違う歩みができる。ひがむな、前をむけ。生き方それぞれ。

みふゆ　あっぱれ。（俊平くんだって）いろいろだよねー。

俊平　ふ。

みふゆ　どんなのうたってたの？　ジャンルっていうの？　ロックとかフォークとかさ、

俊平　あばれる系。

みふゆ　なにアパレル系って。

俊平　こら。
みふゆ　ふふ。へー、あばれてた。
俊平　そう、ちょいあばれ。
みふゆ　あ、ちょいなんだ。へー、いいんじゃない？　とても立派そうで。
俊平　からかうね。
みふゆ　草原に、五匹のひつじにむけて叫ぶ、ラブソング。
俊平　…五匹かー。
みふゆ　きっと俊平くんのうたうラブソングってさ、もっっっっのすごくチープ、でしょ？
俊平　いうねー。
みふゆ　あっりふれたことばで、どっこにでもある感じ。素直に好きだーとかいえなくて、ちょっとそういうとこごまかしてカッコつけちゃう。
俊平　（笑う）ぶんせき。
みふゆ　深入り。おう。
俊平　（嬉しい）。だいたいラブソングなんてうたってないからね。
みふゆ　おう？
俊平　ハハ。一曲。
みふゆ　ほら。
俊平　一曲だけ。
みふゆ　ふーん。
俊平　（間あって）おれいいたかったんだ。たった一人に。愛してるって。おまえ愛してるって。
みふゆ　（冷淡に）そう。
俊平　いおうと思っていえなくってね。夢とか理想とか、チープなおもちゃみたいな逃げ水ばっか追いかけて、肝心なことに気がつくの遅くって、ハッて（気がついた）時にはいなくなってひとりでね。心臓にキリ差し込まれるような痛み、ずっと走って心底くるしくて、大切だったってこと、やっと気がついてね。だから、正確いうと、伝えたかった。愛してるって、もう一度。いま一度。それこそ、そんな音楽なんてだれもいない草原に叫ぶ選挙演説みたいなもんかもしれない。けど、じぶんの全部で、あいつへの想いにそぐうことば探して、長い時間かかってでも、じぶんのなかで噛み砕いたことばとメロディーで、愛してるって伝えたいと思った。
みふゆ　……
俊平　ホンキだった。
みふゆ　……
俊平　ホンキで好きになるってこと、どういう感情かってこと、あいつが引き出してくれて、じぶんでも知らなかった感情がじぶんにあるってことを知ったし、愛することはいつだってたのしかった。（苦笑）…ま、とっくにやめちまったわけだけど、バンド。
みふゆ　……ふーん。曲名なに？
俊平　四つ葉のクローバー。みつけてしあわせだったから。
みふゆ　プ。さいこーにダッサイね。
俊平　まあね。

みふゆ　ほめてない。
俊平　ダセーから。
みふゆ　かっこよくいうな。
俊平　（お笑いタレントを真似て）斎藤さんだぞ。
みふゆ　……。
俊平　（苦笑）こんなこというとあれだけど。いまでもひとりでうたってんだ、その曲。うたうっていうか、アタマのなかじゃなくて、ここん（身体の）なかで、流れちゃうんだよね勝手に。フ。なかなか、一度ホンキを知ると、かんたんにホイホイできないもんだなって。別のだれかに対して、おれの感情が動いたような気がしても、それってホンキとどこか別なんだなって気づかされてしまう、結局のところは。もうみえなくなったあいつが、どうしてか、ここんところでみえつづけているような気がする。聞かせようと思ってつくった曲が、おれひとりがいつまでも聞かされ続けている。
みふゆ　……
俊平　だから、気に入ったいいヒトのまえでは、またそういうじぶんに気がつかされるのが怖くて、目先の欲には生きたくない。だんだんとだんだんとじぶんを相手に馴染ませてゆくようにやってゆきたい。
みふゆ　……
俊平　誘ってくれてありがとう。
みふゆ　え？
俊平　ありがとうね。みふゆさん。
みふゆ　……べつに。
俊平　ありがとう。
みふゆ　……

転換。

シーン１３　山奥・道・深夜

ユリが歩いてくる。

ユリ　さまよいこんでしまった――。

あのあと駅のホームで、傘の女性をまたもやみかけてしまい、遊び心であとを追いかけた。知らないところに行くのはキライじゃない、し、うまく説明できないけれど、まるで、なくてはならないものがあるような気がして、してしまって、つい気になってあの傘女性を追いかけたのだった。八王子とか埼玉あたりに行くかと思ったら、ずっと遠くにさまよいこんで、ケータイの電池も切れてしまって、アタシはひとり、行っても行っても、行っても、見慣れたようなお店、でも見慣れない場所、見慣れない風景知らない土地の看板、んや、実は知っていて知っていないような気がしているだけなのかもしれないけれど、とにかくアタシが行き当たる道という道は、いっこうにアタシを元の来た道に戻してはくれなかった。

（間）いつまで経ってもたとえ、たどり着けない場所でも、それでもいつかは行き当たってくれる。「地球はまるい」。かならず元に行き当たるってもんだ。

歩く。ちょっと鼻歌。

ユリ　たいてい、ヒトは目的地までの道に迷いたくない。用心して道順を覚えたり調べたりする。けど、さっきまでネカフェで満喫していたアタシは、仕事みつけたいという目的でクリックアンサー的な素早さでナニカにナビゲートされることに違和感を持とうと思った。（やっぱり）ほんとうの目的地をこころにみつけられたい。すこしでも面白味を感じるほうへ右手のマウスの矢印を、サーフィンしてゆくように、もっと身体で動いてゆきたい、たとえ理屈もことばも通らなくても、未熟無知でも、平気で。せっかくグローバルな時代に生きている。まえの時代に戦争があって、このさきにも戦争が起きたとしても、アタシが生きている時代が、どの時代よりもいちばん生きやすいハズであるって思っておこう。なにかの本で読んだ――ヒトは、まえの生活から得た経験をたずさえてもう一つの命を始めることができない、若さのなんたるかを知らずに青春時代は去り、結婚の意味を知らずに結婚し、老境に入るときですらじぶんがなにに向かって歩いているかを知らない、人間の世界は未熟なんだよ。バーイ、クンデラ。目的地もわからずグラグラ気持ちも揺れ続けて、不安で不確かでも、未熟無知はのがれられない。用心して身構えて、無難に避けて通るばかりが大事なんじゃない。迷ってもまえをゆけ。カーナビ。ETCとかいてエトセトラと読め。それにしてもあの女性は菓子折りを持ってどこに向かったのだろう。

さっきの鼻歌「浪漫飛行」を今度はクチずさみ、歩く。

と、ギクリする。

目のまえに、女が行き倒れている。

ユリ　（鼻歌を途切らせず、しぼませながら続けて）――

（どうしよたもんかと迷い）――
（見て見ぬふりで素通りしてみよう。として歩き出し）――
（あっと思って、女に合掌（仏教的な）を）――
（あっと思って十文字（キリスト教的な）を切って合掌し）――
（女の様子をじっと見ていたら）――

女、ハッと目をさます。

ユリ　！！！
ともえ　うはぁ！
ユリ　！！！！！！
ともえ　――

ユリと女、視線がカチ合う。

ともえ　……。
ユリ　……？

ユリ、怖かったぶん、よけいに嬉しくて、うわーっと駆け寄る。

ユリ　こんなことというとあれかもですけど。死んでるかと思いました。（抱きつく）すっごく嬉しいです！　全く知らないヒトですけど、生きててよかったー！（間）ええッ。すごい汗。飲みますか水とか。

ユリ、急いでキャリーからペットボトルを探す、が、なくて、

ユリ　はい。
ともえ　？　（「強力わかもと」ドリンクを渡されたので）？
ユリ　こんなのしかなくて。
ともえ　…え、胃ですか？
ユリ　（確信を持っていう）やはり生きるとは胃袋かと。会社だけじゃなく、こんな山道に入っても痛感しました。（冗談でいう）山の幸。なんでも食べられるわけじゃないんで。
ともえ　はあ。

ともえ、飲むか迷う。

ともえ　（ビンを見て）すごい「ダブリュー」……。
ユリ　こんなん。（と、プロレスラーのようなポーズ）

ともえ、飲む。

ともえ　ぐえええええ。
ユリ　フフ、元気。
ともえ　ぐえええええ。ぐえええええ。
ユリ　もう元気。
ともえ　ぅううううありが…ざいます。
ユリ　（アタシ）いつも飲んでる。（キャリーを指す）。
ともえ　……？　あんなに？
ユリ　ま。あれはおもに仕事道具だけど。
ともえ　（旅行じゃないんだというのを、のみこんで）行商ですか、わかもとの。
ユリ　わかもとじゃありません。無職です。まだ三日目くらいですけど。辞めてそのまま帰んないまんま。なんで、近づくと臭いですよ。フフ。
ともえ　……

間――

ともえ　ひとりですか？
ユリ　ひとり。ひとり？
ともえ　…はぐれてった。ま、べつにいいんだけど。
ユリ　ともだち？
ともえ　（首を振る）
ユリ　男の人。
ともえ　なのかな。
ユリ　おいてくのヒドイね。
ともえ　なんとも（いえない）。
ユリ　……ふーん。
ともえ　実際いたのかどうかわかんない。
ユリ　一緒だったでも。
ともえ　（受け取った紙を確認し）
ユリ　手紙？
ともえ　ううん。そんなじゃない。
ユリ　ふーん。くしゃくしゃだね。なに。
ともえ　教えない。
ユリ　いいよー教えなくて。（教えてほしい語調）

間――

ともえ　むかしむかし。ちょっといい人。
ユリ　アラ？
ともえ　呼び出して。なん年ぶり。（紙をしまう）高校ン家庭教師。
ユリ　ロマンス。
ともえ　フ。ぜんぜん。静かで。おどろくほどしゃべらない。ドア、ノックすると、スリッパも、音させないような。部屋にふたりっきりでも、いるのかいない

のか、気配あんまナイ。生きてるのか死んでるのかってくらい、隅のほうでジッと静か。あたしが課題終わるまで小説読んで。せんせーって（いって）横顔をみつめれば、顔を逸らす。意気地ない男。虚弱で日陰ばかり歩いてそう、なくせに、太陽でちゃんと顔や皮膚が健康的に焦げていて、首筋や鎖骨になるといい感じで。

「ひざまずけ」とかいったら、でもやっちゃいそうで。いわなかったけど。

ユリ　ふふ。好きな人。

ともえ　そんなんじゃない。

ユリ　そんなんだ。

ともえ　フン。

ユリ　どんな男？

ともえ　…佐藤浩一？

ユリ　さとうこういち？　渋いアノ？

ともえ　（そ。）佐藤浩一。

ユリ　佐藤浩一（ねえ）…、

ともえ　佐藤浩一（だったんだけどなあ）……

ユリ　佐藤浩一（が家庭教師ねえ）……

ともえ　（まえは）佐藤浩一（だったはずなんだけどなぁ）。

ユリ　佐藤浩一（が）ねえ……

ともえ　ね、イメージ一致してる？

ユリ　（笑って）あってるあってる。佐藤浩一いいねえ。（かっかっか、と笑う）

ともえ　むかしは。会ったらガッカリだ。胃袋、細長くしぼんでそうだった。コレあげたいくらい。

ユリ　フフ。どうせ遠出なら、（アタシなら）真田広之かぁトヨエツかぁ藤木直人がいいなー。

ともえ　ホントね。

ふたり、穏やかに笑う。

間――

ともえ、静かに話し始める。

ともえ　あたし、さっきまで死んでたんだと思うんだー。

ユリ　おおっ。

ともえ　地面にスーって音もしないでポッカリ大きい黒いアナが空いて、ゆっくーり、身体が沈んでいったの。そこは静かだった。あたしが大泣きしている、それ以外、とりたてて、音もなくて。ツーンと声が聞こえた。名前が呼ばれた。ともえ。きゅうに身体の芯が痛んだ。耳を塞いだ。ひんやりとした光が差してきた。糸のようにとても細くて、ともえともえって呼びかけてくる声と繋がっている気がした。あたしはチカラの限り、逃げるでもなく、うずくまった。あたしの身体から黒い油のようなナニカが、液体が、じくりじくり、にじみでてきた。でてくるので、痛ましさと恐怖を感じるんだけど痛いという感覚があるわけでもないから現実感がなくて夢のようで……脈絡もない怖さだけがあった……。

間。

ユリ　リボーン。
ともえ　…？
ユリ　リボーン。おめでとう。おめでとうございます。
ともえ　……？
ユリ　じゃ、はい、わかもと。（また一本差し出す）
ともえ　……またぁ？
ユリ　――（黙って受け取れ、という思い）
ともえ　…マジか。（受け取る）
ユリ　しあわせになってほしいです。
ともえ　え？
ユリ　へへへへへ。ヒトってそんな違わないよ？　いっちゃえば、全員人間。みんな人間。だから、思うこと、考えること、伝えたいこと、話すこと、笑うこと、嬉しいこと、ガッカリなこと、腹カッカすること、まばたき、手を振ること、だいたい通じ合える。（ともえに）通じ合えるよ？　わかるよ？　よっぽど違う人間のほうが少ない。ピース。
ともえ　…そう。
ユリ　ピース。
ともえ　？　なにピース？
ユリ　ピース。
ともえ　ピース？
ユリ　あはは。
ともえ　？　あはは？
ユリ　うふふ。
ともえ　うふふ？
ユリ　――（うなずく）しんどくないよ。
ともえ　……

ともえ、ユリに抱きつく。

ともえ　しんどくないよ。
ユリ　――
ともえ　（やがていう）ほんとだ。くさい。
ユリ　だろ？

転換。

シーン１４　渋谷・夜景の見えるバー・深夜の深い頃

夜景の見渡せるカウンター席に、座っているキリコ。
その少し離れた席に同じく座っている、みわ。

どちらも相手を視界の端に捉えながら、お互いに気にしている時間がある。

キリコ　（やがて声をかける）甘いものお好きですか？
みわ　え、ああ、まあはい。
キリコ　よかったらもらってくれない？　東京駅でお土産買って。
みわ　と、東京駅。
キリコ　バナナ。
みわ　……
キリコ　よくみかけるとは思うけど。もったいなくて。
みわ　……いい…んですか？
キリコ　むしろ（もらって）。
みわ　…じゃ、じゃあ……（いただきます）。
キリコ　嬉しい。

キリコ、みわに渡して、席に戻る。
みわ、話しかけてみる。

みわ　待ち合わせ、ですか？
キリコ　ひとり。
みわ　わたしも。となり、いいですか？
キリコ　どうぞ。

みわ、移動し、となりに座ろうとして、

みわ　……（ためらって、となりのとなりの席に座る）

ちょっとの間。

みわ　なんか、駅の交差点なんかも、じつは夜景スポットらしいんですけど、落ち着いてネオンの光とかたのしめなくって。静かにこういう、ここの眺め、いいですよね。
キリコ　あの交差点、夜景のスポットなの？
みわ　らしいです。写真じゃアートチックに、キレイで。
キリコ　へー。
みわ　わたしにはとてもそうは（みえないけど）。
キリコ　わたし。夜景とか興味なかったけど、嫌いじゃないかも。ここの。
みわ　先日も来てましたね。
キリコ　え？
みわ　男性二人相手に。
キリコ　…、
みわ　すみません。わたし、あっちのほうにいて。ひとりでずっとみてて。…あのお名前は……？

キリコ　キリコで（お願いします）。
みわ　キリコさんの屈託なく笑ってる、それが印象的で。それでちょっと、いやいえ、かなり、覚えてて、それを。
キリコ　……
みわ　すみません。あの晩、ちょうど田舎から東京出てきたんです。
キリコ　三連休だものね。
みわ　はい。みわといいます。わたし。
キリコ　ああ、どうも。
みわ　バナナ、助かっちゃった。東京みやげ。
キリコ　……
みわ　それで、やりましたか。
キリコ　なにを？
みわ　セックス。
キリコ　…え？
みわ　メガネじゃないほうですよね、好きなヒト？
キリコ　……え？
みわ　――どうなんですか？
キリコ　……すごいこと聞くのね。
みわ　はい。
キリコ　みてたのずっと？
みわ　そこまでガン見じゃないですよ。でも、はい。
キリコ　……酔ってるの？
みわ　酔ってなくても聞いちゃいます。聞いちゃうし、わたし好きだし、セックス。
キリコ　え。
みわ　と、いうのは大げさですけど、さすがに。
キリコ　…、
みわ　わたし四年前までこっち暮らしてて。…キリコさんみたく笑いたかった。

みわ、話したくて話しはじめる。

みわ　渋谷とか池袋とか、とにかくこっちヒトわんさかいるのに、だれも、わたしと波長のあうヒト、あってくれるヒト、それこそわたしが、だれにも伝えることできなくて、ふわふわ漂わせちゃうヒッソリな思いを、ピタッと受信してくれるだれか…へへ、どこにもいないんだなー、いないんだよなコンチクショー。へへ。ワーッと、じぶんガソリン吹かして、男のヒトのいいようういいよう、大げさな芝居したりなんかもしたことあったけどハハ。…男のヒトにね、触れてもらえることも、声をかけられることもなかった。照り続き半端なくって干からびそうな不毛さく、一〇年もわたし。もうピタッとしたヒト探すのよそう、あらわれない、諦めよう。つかれちゃった。そんなとき、母が病気になって。タイミングよすぎる病気の知らせを受けちゃって。特に東京でなにしてるわけじゃなかったし、もーう、ひとつの潮時だなって。そんなこと思った。兄いるけど、日本を離れて仕事してて。四歳と二歳。家族がいて。わたしが戻るしかないって。

いよいよ東京離れるってとき、思いきって、ヤらしいことしたいヒトたちが集まるお店？に行ったんですよね。六人くらいかな。わたし常連さんたちとなんか盛り上がっちゃって、そのなかで一番上手っていうおじさん？とね、ノリもあって、そういうこと、やったんですよ。初めて。すっごいよくて。それが。ふつうは痛いってよく聞いてたけど、最初のセックスから強い快感あって。あのヒトそれに、めちゃくちゃやさしくてやさしくて、技術？とかじゃないっていうか、こころでわたしを触れてくれて、触れてくる気がして。泣いて、泣きすぎて、どろどろの顔になってもまだ泣いて。紙かヌノかなんかが焦げた、きなくさい匂いのする部屋だったのに、生きてるって心地、した。ハッキリ。ホンキで思えた。光が、色彩が、鮮やかなんだなってことを知った。ジンジャエールが美味しかった。…あのおじさん、なにしてるんだろう。

あのヒト、ゼッタイわたしのピタッとしたヒトじゃないけど、あのおじさんとのあの瞬間があったおかげで、救われたなーって思ってる。田舎に戻ったけれど、一生縁ないと思っていた結婚までできた。子どもも来年つくる予定。わたし万歳。なんちゃって。

気まずいような間。

みわ　はは……

キリコ　お母さん、病気、いまは？

みわ　よっぽど、ピンピン。

キリコ　そう。それはよかった。ね？

みわ　あ、はい…、なんか余計なことばかり喋っちゃってすみません。

キリコ　ううん。

みわ　キリコさんのあの屈託のない、笑ってた顔が。ホント、よくて。はい。

キリコ　（間あって）だれも相手してくれない、そう思うときのさびしさ、わたしも似たような気持ちあったから、わかるけど、でも、どうして、あらわれないって諦めちゃったの？　諦めちゃいけないものじゃないの？

みわ　あの頃はたしかに特別を探してました。でもいまは、ヒトはだれとでもそこそこしあわせになれるって気がします。だれとでも暮らしていけるんじゃないかって。

キリコ　そお？

みわ　きっと、愛情なんてものは、あとからついてくるし、もともとじぶんだけが持っている愛のカタチ？みたいな器か容器があるとしたら、それにピタッとはまるカタチを探す必要なんかホントはなくて、じつは、相手次第でだんだんとカタチが合うように変わってゆけてしまえて、で、その相手とじわじわカチッとカタチづくられてゆくもんじゃないかって、思うようになって。はい。

キリコ　……そう。

みわ　旦那のおかげです。

キリコ　ピタッとしたヒトなんじゃないの（旦那が）。

みわ　ぜんぜん。けど、そうなって「これた」のかもしれないです。

キリコ　……

みわ　すみません、なんか。

間。

キリコ　わたしはね、菓子折り、あるひとのご両親に挨拶に行くために買ったの。
みわ　え？
キリコ　二度目。はじめてじゃない。山形なんだけど、途中の駅で、わたしひとり、引き返してきて。それからずっとココ。ずっと忘れられないヒトだったの。メガネじゃないほう。
みわ　ああ。はい。
キリコ　――
みわ　……
キリコ　――もし、たったひとりのヒトを探し尋ね歩くのが人生だったなら、わたしはもう、その相手には出逢ってしまっていて、そして失ってしまっていて、
みわ　はい。
キリコ　途絶えてしまった昔の道のはずなのに、まだ諦めきれなくて……。（だから）……みわさんがなんだかうらやましい。…いっそ、動物になりたい。そしたら、いろんな困難も、殻も、突き破っていけるんなんだけどな……。

間。

みわ　もらってよかったんですか（お菓子）？
キリコ　それはもう、みわさんの。必要になることないし。もしでも必要になったらまた買うし。
みわ　…母に持って行きますね。
キリコ　（穏やかに）ええ。

転換。

シーン１５　山奥・道・深夜（明け方に近い）

疲れた様子で歩いている、ユリとともえ。
長いあいだヒッチハイクできずにいる。

ユリ　通りませんなー？
ともえ　通りませんねー？

ともえ、しゃがむ。寝転ぶ。

ユリ　ら！よく地べた寝転べるね？

ともえ、真っ暗な夜空を見ている。
ユリ、つられて、地べたに座ってみて、夜空を見あげて、

ユリ　空。星ひとつない。
ともえ　まっくら。
ユリ　知ってる？　あのまっくらいなかを、みえない光が走りまくってて、一秒間に地球七周してるんだって。それって走ってるのかなぁ、歩いてるのかなぁ。
ともえ　七周半ね。
ユリ　ん？
ともえ　ぐるぐる。
ユリ　オーケイ（オーイエスみたいな語調）。
ともえ　歩くのか走るのか、一秒間に地球を七周半するヒカリは、ひかりを受け止めてくれる場所やモノがないので七周半もします。ゴールかわからないけれど、ヒカリはこういうモノ（服）に吸収されたり、スリ抜けたり、そして遠いあんな宇宙の空間にまた逃げて行く、行くんだそうです。ちなみに、こういったモノに吸収されなかった光が、そのモノの色になってます。たとえば、緑色の葉っぱは、緑色の光が反射しています。葉っぱは、光のなかの色のいろいろあるなかの、緑色以外の光を吸収してるからです。
ユリ　教師か。
ともえ　佐藤のおかげ。
ユリ　ま。コペンハーゲンニクス的だね。ちっとも理解追いつきませんぜー。
ともえ　なにそれ。

間。

ユリ　簡単にわかったふうなことというわけじゃないけど。
ともえ　ん？
ユリ　連絡しないでもう会えなくするのも、本当はすっごく苦しいんだろうね、相手も。
ともえ　（間あって）そう…だと思う。カン違いじゃなくて、ウン。

ユリ　じゃ、相手だって簡単に忘れられるわけじゃないね？　耐えてる、もう連絡しないこと。忘れられるようにしなきゃって頑張ってるよ、きっと。
ともえ　…そうかな？　悩んで結局は離れてった。
ユリ　うん。でも（アタシ）思うけど、毎日一緒にいたり、毎日連絡とってつながっていなくても、かりにもし死に別れたとしてもね、こころから相手のことを想うキモチがあれば、充分それも愛し合えてるんじゃないかな。ウチのおばあちゃんみてるとそう思うよ。愛、失ってない。それにもし、ホントにウンメと思えるヒトだったなら、離れていったことはきっと、偶発的なことじゃなくて必然だったんだって、そう、思えるようになれる「瞬間」が、絶対いつか来るよ。別れをいつか振り返った時に、「完全な必然」だったんだって、思えちゃうような瞬間、来るんだよ絶対。
ともえ　完全な必然？
ユリ　だってそしたらホントに、ウンメのヒトでしょ。（だって）別れがシンジツだったってことになるでしょ？　くっつくだけがウンメじゃない。
ともえ　……
ユリ　だんだんと、時間かけてじわじわ、身にしみてわかってくる日が、フフ、来たらイイね？
ともえ　……なんか、ピタリ決まったと思ってたのに、これもいっときのものになっちゃうのがかなしいなあ。
ユリ　ピタリ、なかなかいないよ？　ピタリとピタリいいな。そうそういないんじゃない？　ま、たくさんいたらいたで困っちゃうけどねー。
ともえ　…かもね。
ユリ　ふふ。ピタリと巡り出会って、深くお互いどうし、ニンゲンを深め合えたなら――そんな経験を持てれば、これから先いろんなことに耐えて行ける――そんな気がしない？、たとえ離れ離れになったとしても。だって、もしかしたら、巡り出会う、それを待つために生まれてきたようなものなのかもしれないじゃん（生きるって）。ピース。
ともえ　（またピースと思ったが、ぐーっと寝転んで）ピース。

ふっと走ってくるクルマの音に気づいて、ユリ、起き上がり、

ユリ　あ？　お？　おお？　（車に手を振る）おーい！　（ともえに）ね、起きて、立って、振って、ほら。（おーいと手を振る）
ともえ　ピース。
ユリ　（ともえに）起きろ。立て。こら。そこで振るな。（振って）おーい。

転換。

シーン１６　走る車・内・明け方に近い深夜

ともえ、ユリが、俊平たちの車に乗車している。

ユリ　ユリです。
ともえ　ともえです。
みふゆ　みふゆです。
俊平　斎藤です。

ちょっとの間。

ユリ　ホント、助かります。
ともえ　助かりました。
みふゆ　ぜんぜん。方角、一緒だし。
俊平　おばけかと思った。
みふゆ　ドッキリした。
ユリ　はい。あやうく、いきだおれ。
ともえ　おおげさ。
ユリ　へへへ。

ちょっと間。

俊平　道に倒れてナントカどうのって。そんな歌詞あるよね、うたで。
ユリ　え？
ともえ　（思い当たる気がして）あたし、知ってるかも。…わかんないけど。
俊平　ね、あるよね？
みふゆ　このひと、歌くわしーの。でもほっといていいから。ドライバーだから。
俊平　男は黙ってドライバー。はい

転換（配置換えのみ）。

シーン17　走る車内・内

時間経過していて――

ともえ　あそこのテレビ、
俊平　ん、さっきの？
ともえ　はい。東京、雨だって。ニュース。
俊平　毎度まいど。九月はしょうがない。
ユリ　また台風くるみたいだね。
ともえ　うん。中継してたね。

ともえ、中継ということばに、なにかが思い出されてきて「……」。

みふゆ　さっきの親子。顔そっくりだったね。
俊平　あんな笑ったら失礼だよ。不思議そうに見返してたじゃん。
みふゆ　その顔もそっくりだった。
ユリ　（あのふたり）おいしそうにうどん食べてた。
みふゆ　その顔もそっくり。
俊平　蕎麦がうまいってのに。
みふゆ　月見そば（がなにいう）。
俊平　サービスエリアのって、じつはコシがあるんだって。
みふゆ　ありません。
ともえ　（フッと思い出して）あ。あ、あ、ジョゼじゃないんだ……
みふゆ　なに？
ともえ　ジョゼ。映画。砂浜にクジラが座礁してるの。
ユリ　（知っていて、すぐに答える）ジョゼと虎と魚たち？
ともえ　そう。知ってる？
ユリ　うん、（でも）それきっと「きょうのできごと」だよ。
ともえ　なの？
ユリ　うんうん。そうそう。似てるもん。見た目。雰囲気？　テイスト？　パッケージ？　まー、おなじ妻夫木だし。ストロベリーショートケイクスも似てるよね。
ともえ　「きょうのできごと」かー。

間。

俊平　（ガラスに雨粒落ちてきたので）お。降ってきた。
みふゆ　（残念そうにいう）東京かー。なんで急に欠員出ちゃうかなー。
俊平　ま、特になにがあるわけじゃないけど、頑張ろう。
ユリ　もどってもなぁー。もどっちゃうのかぁー。
みふゆ　ねえ、就職できなかったらどうするの？
ユリ　まー、地球の裏側？まで行ってみよっかなー。
みふゆ　おー。地球からはみ出ちゃいそう。

俊平　裏側ってどこだろ。
みふゆ　遠いんだろなー。ついていきたいなー。あー、せめて意識よ、彼方へ飛んでゆけー。
俊平　「東京の空はもっと真っ暗がいい」。
みふゆ　うん？
俊平　真っ暗すぎる空、みたじゃん。頑張れるって。
みふゆ　東京、やま、みえない。
俊平　ビルみえるよ？
みふゆ　ビルは木でも林でもない、トウリーじゃない。
俊平　電車たくさん走ってるよ？
みふゆ　数のわり、乗るのちょっとだし。
ユリ　あはは。
俊平　自動販売機たくさんあるよ？
みふゆ　多すぎ。
俊平　勤務地は？
みふゆ　武蔵小杉。
俊平　新宿駅前？
みふゆ　アルタ前。
俊平　渋谷駅前？
みふゆ　ツタヤとスターバックス。

ともえを残して、他三人は方々へ去って行く。
ひとり残ったともえ、やがて、

ともえ　（ふとクチをついたようにクチずさむ「わかれうた」の出だし）♩

沈黙。

ともえ　♪　ふーふーふふふ……。たーたーたたた……。たたーんたたたー……。

道にひとり立ち尽くす――。

シーン１８　渋谷駅前・明け方

雨の渋谷駅前。まだ暗い明け方。雨模様。
傘をさしたひとびとが交差し、交錯する。
（シーン２と似ているようで少し違うようで似ているような）
ともえ、俊平、キリコ、みわ。傘をさし、それぞれ歩いている。
決して明るくはなく。

やがてユリが歩いてくる。立ち止まり、

ユリ　おおっ？　ふっと視線を向けた先、このスクランブル交差点の、外国人にはカオスのわりに秩序立っているよねって評判らしいこのヒト波の先に、あの傘女性をみつけた。
雨でみんなが急ぎ足のこのなかを、マッスグだれとぶつからないで颯爽とマッスグ行く。またあの女性はおどろくことだろう。ふっとそんなこと想像したら、ララ、ふふ、胸の鼓動が高鳴った。バレリーナの足でひょいひょいぴょんぴょん優雅に軽やかに行こうか。あるいは、あるいは海開きの日、ピーという笛の合図で一斉に砂浜を駆けて海に入ってくときの、あの気分で駆け抜いて行こうか、このスクランブル交差点。

ユリ、スニーカーを脱ぐ。靴下も脱ぐ。裸足になる。
靴下をスニーカーに突っ込んで、手に持つ。駆け抜けようとする。と、

ユリ　？？？？

キリコを見失ってしまった。

ユリ　へへン。まー歩こう。

歩く。歩く。まっすぐ歩く。

ユリ　雨のなかの裸足はキモチよかった。この道が、伸びてゆく一本の線のように感じられた。メートル換算のことはよくわからないけれど、一本線はマッッスグ際限なくて、アタシの視界と世界と空間とが伸びて膨らんでゆき、いつもの景色が鮮明に違ってみえた。この東京の街がアタシの身体にアタマに圧倒的に支配してくるアレコレの中なんかに居座ってくよりも、もっと澄んだ景色がみたくなって、この一直線をこのまま走り出さなければいけいない気がした。なぜかはわからない。わからないことは好きだ。よし。

ゆく。歩いてゆく。（去る）
転換。

シーン１９　数日後・みふゆのひとり暮らしの部屋・内・夕

地べたに、みゆき。

みふゆ　（ビールを音を立てて飲み続ける）――――（飲み干す）――

ぼんやりする。酔いがまわる心地よい時間。

ごろりと床に寝転んでゆく――。やがて、

みふゆ　俊平くんの、ばかやろぅ……

ごろりと身体の向きを変える。

目が、床のほこりを捉える。

指で静かにゆっくり拭う――

間。

背中に手をまわして、ブラジャーのホックを外す。

身体がゆるんでゆく時間がある。

ジーパンに手を回し、ゆっくり脱ぎかかろうとして、

みふゆ　（床の埃を吹こうとして）ふっー。ふっ。「ふっ」。

と、思わずいってみて、

みふゆ　フ。（と、さびしく笑う）

（脱ぐことを忘れて）仰向けになる。

寝転んだまま、虚空にことばを投げる。

みふゆ　ふっ。ふっ。ふっ。

シャボン玉みたく「ふっ」が浮かぶのを見た気がして、さびしく笑ってしまう。

みふゆ　フフ。おかしいな。みえる。ふっ。ふっ。ふっ。（ことばを変える）あっ、は、はー。ハハ（と、笑う。またいう）。あ。はっ。はっ…。はっ。はっ。はっ。はっ。

なんだがどんどん切なくなってくる――

さみしくてさみしくて感極まってきて、泣けてきて、

みふゆ　（なにもいえなくなって）……フフ。

転換。

シーン２０　ともえの部屋・内・夕

ともえがひとり。
床に寝転がってスマホに触れている。

ともえ　（電話帳をスクロールして、ダイヤルする）――

間。

ともえ　もしもし。

間。

ともえ　つながった。……（先生）生きてた。

間。

ともえ　――うん、（あたしも）生きてるよ。

やがて、ぐーっと伸びて。
そのなかで「暗」転――

音楽――
真っ暗のなかに声。

ユリの声　（語り）ヒトが生き果てる瞬間は、きっと光に包まれる。ムコウとコッチは、ひとつのおなじ光でつながれている。生きる体験も死んでしまう体験も、ヒトは受け身でしかない。光が光それ自体として生きていかれないのと同じように、おなじ受け身同士が繋がって、そしてひとつの平安に満たされて、あたたかい、安らかな、満足のなかで命は消えてゆく。

終――――。

【参考映像】
・映画
「きょうのできごと」監督 行定勲
「ジョゼと虎と魚たち」監督 犬童一心　原作

【参考書籍・サイト】
・「贈る言葉」柴田翔
・「女ごの為の最後の詩集　誰かを探すために」室生犀星
・「存在の耐えられない軽さ」ミラン・クンデラ
・「晴天の迷いクジラ」窪美澄
・「クジラは海の資源か神獣か」石川創
・「光と色と」光学と色彩学についての話題サイト
・「Photon てらす」光を学ぶウェブサイト
・「goo ウオッチ」路上で干からびているミミズの謎サイト